

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	静岡県	番号	22
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
熱海市	熱海市立第一小学校	229
御前崎市	御前崎市第一小学校	658

※ 児童生徒数については、今年度、協力校に在籍する児童生徒数を記述する。

○ 実践研究の内容

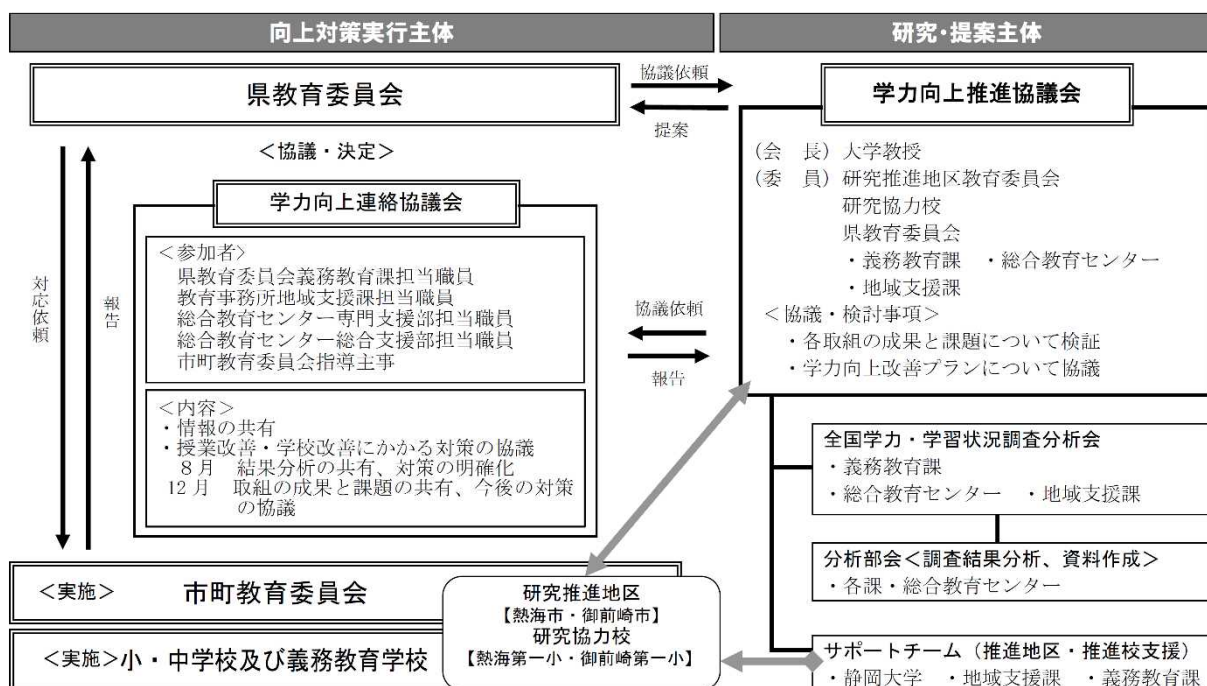
1. 推進地域における取組

静岡県では、平成25年度以降、「学力向上推進協議会」「学力向上連絡協議会」という二つの協議会を立ち上げ、確かな学力を育む向上推進プロジェクト事業を推進している。

(1) 学力向上推進プロジェクト事業

○学力向上推進プロジェクト

確かな学力の育成のため、全国学力・学習状況調査結果を受け、学校、市町教育委員会、県教育委員会が連携し、学校改善・授業改善を支援する環境づくりや推進地区、推進校による実践研究を通じた学力向上の具体策を検討するとともに、更なる改善プランをまとめ、啓発していく。



ア 事業の目的

全国学力・学習状況調査の問題や結果を受け、静岡県小・中学生の学力向上のため、学校、市町教育委員会、県教育委員会が連携し、学校改善・授業改善を支援する環境づくりや研究推進校による実践研究を通して具体策を検討するとともに、更なる改善プランをまとめ、啓発する。

イ 事業内容

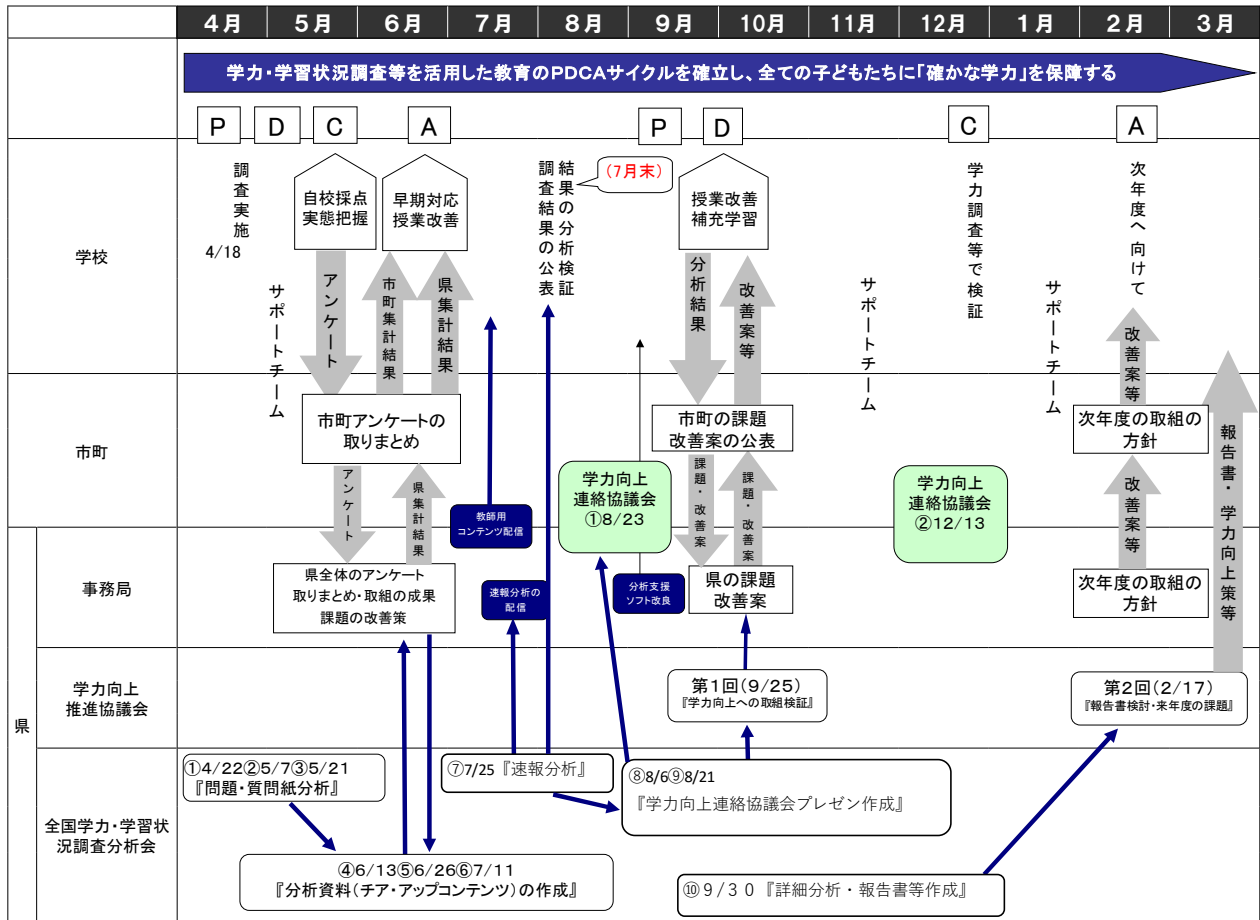
- ・「平成 30 年度学力向上推進協議会報告書～静岡県の子供の『確かな学力』育成に向けて～（平成 30 年度末配信）」を受け、学校、市町教育委員会、県教育委員会の取組について進捗状況を確認するとともに、平成 31 年度の全国学力・学習状況調査の問題や結果分析を踏まえて、更なる具体策を「学力向上推進協議会」で検討し、学校改善・授業改善の意識を啓発した。
- ・サポートチームが、研究推進校に対して、全国学力・学習状況調査結果の分析方法や学校改善・授業改善について助言を行った。
- ・「学力向上連絡協議会」において静岡県教育委員会指導主事と市町教育委員会の学力担当が一堂に会し、情報の共有や授業改善・学校改善に係る対策の協議を行った。

ウ 検証組織

学力向上推進協議会をメインとして、作業部会に全国学力・学習状況調査分析会を置いた。学力向上連絡協議会で情報の共有を行い、オール静岡で授業改善・学校改善に取り組んできた。

- ・学力向上推進協議会
静岡大学大学院教育学研究科、推進地区の教育委員会代表、研究推進校校長、義務教育課、地域支援課、総合教育センター
- ・全国学力・学習状況調査分析会
義務教育課、地域支援課、総合教育センター
- ・サポートチーム
静岡大学大学院教育学研究科、地域支援課、義務教育課
- ・学力向上連絡協議会
義務教育課、地域支援課、総合教育センター、市町教育委員会

(2) 平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査等を活用した『PDCA』改善サイクル



(3) 静岡県の情報提供型の取組 (教育広報紙「Eジャーナルしずおか」第220号 令和2年2月5日)

新学習指導要領時代の授業とは? ~情報を取り入れ主体的な取組を~

県教育委員会は、各市町教育委員会・各学校に対し、新学習指導要領の全面実施に向けたさまざまな情報を提供しております。また、全国学力・学習状況調査の学校質問紙等から、静岡県の各学校は熱心な校内研修が行われているということが分かっています。国や県が作成した資料等は、充実した校内研修の中で、子どもの実態に応じて上手に活用されています。新学習指導要領に基づく授業づくりにおいても、有益な情報を提供し、各市町教育委員会・各学校の主体的な「研修」「授業づくり」を支援します!

Q 授業例が紹介された資料はありますか

A 全国学力・学習状況調査の調査問題にヒントがあります。

全国学力・学習状況調査の問題は、新学習指導要領を先取りした内容となっており、扱われている授業(例)は、新学習指導要領の理念を具現化した授業モデルとなっています。県教育委員会では、調査問題及び結果を分析し、静岡県の実態を踏まえ解説する動画(チャ・アップコンテンツ)を作成しています。校内研修等で、御活用ください。



平成29年度小学校国語B問題より

実際の調査問題を御覧になり、この授業を読み解いてみてください。



「チャ・アップコンテンツ2019」より



「チャ・アップコンテンツ2015~2018掲載HP」

Q 静岡県が大切にしている授業とは

A 学び手の視点で授業をつくることです。

県教育委員会は、平成30年度末に発行した教師用指導資料「自分ごと(自分の事)として学ぶ子供」で、授業づくりの理念を示しました。



静岡県が大切にしている授業づくりのイメージ図

本資料は、静岡県が大切にしてきた授業づくりの理念を、A4裏表2枚に凝縮して伝えています。手に取って、ご自身の授業実践を振り返ってみてください。

本資料及び説明動画掲載HP

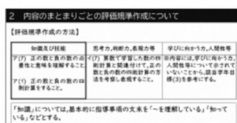


Q 学習評価について知りたい

A 国や県から学習評価に関する資料が出ています。

学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものです。この理念のもと、国からは、「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会)、「学習評価の在り方ハンドブック」(文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター)が示されています。

また、県教育委員会は、「学習評価に関する資料」と称した資料を作成して、DVDに収め、各学校に届くよう各市町教育委員会に提供しました。ぜひ御活用ください。



中学校数学の学習評価説明動画より

これらのコンテンツと連動した研修会や学校訪問を行います!

問 義務教育課 TEL 054(221)3106

2. 推進地区における取組

	熱海市	御前崎市
研究課題	<ul style="list-style-type: none"> ・子供がなりたい自分の姿を目指し、主体的に追究し続け、表現することができる力の育成 ・これまでの教育実践を大切にしながらも、将来を生きる子供たちのために、授業改善し続ける教師集団の育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・「育成すべき資質・能力を明確にした授業づくり」の推進 ・客観的データを基にした学力課題の洗い出しと対応方法・解消方法の提案 ・家庭地域を巻きこんだ児童生徒の基本的生活習慣の確立
取組	<p>(1) 熱海市全国学力・学習状況調査検証委員会による結果の分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度の結果を分析し、具体的な課題と市内共通の授業改善の視点を新学習指導要領で求められている資質・能力との関連でリーフレットにまとめた。 <p>(2) 学力向上委員会の開催による各校の校内研修体制への支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研修主任に対し、県教師用指導資料「自分ごと（自分の事）として学ぶ子供」やPDCAサイクルを生かした研修計画等について説明、協議を行った。 <p>(3) 「学び続ける教師のチェックシート」の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「授業力」「生徒指導力」「業務遂行力や組織運営力」の3観点で自己評価を行い、教師の資質向上の視点として分析した。 <p>(4) 協力校への支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県サポートチームとの連携を進めた。 ・協力校の好事例を市内で共有。 <p>(5) 地域・保護者への啓発</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リーフレットを配布し、HPにも掲載した。 	<p>(1) 「育成すべき資質・能力を明確にした授業づくり」の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上智大学奈須教授を招いての校内研修を市内5校で行った。 ・市内小・中学校の教職員参加のスクラム研究会を年2回実施した。 ・市内研修主任参加の授業改善推進委員会を年5回開催した。 <p>(2) 客観的データを基にした学力課題の洗い出しと対応方法・解消方法の提案</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全国学力・学習状況調査の早期対応 ・標準学力調査（東京書籍）国語、算数の活用（市内全小2～5年生） <p>(3) 家庭地域を巻きこんだ児童生徒の基本的生活習慣の確立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スクラムスクール運営会議（御前崎版コミュニティ・スクール）での「早寝・早起き・朝ごはん」の推進 ・基本的生活習慣に関するPTAの広報活動 ・全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果の分析と結果公表。

3. 協力校における取組

	熱海市立第一小学校	御前崎市立第一小学校
研究概要	<p>「すべての子供たちが学習に参加しているか」と「子供が夢中になる授業とは」を授業改善の視点として研究を行った。「聴くこと」を意識し、学年段階に応じたスキルを共有し、聴き合う集団作りを目指すとともに、子供主体の授業の良い点、課題点を考慮し、タイムマネジメントを意識し、各学年の学力を詳細に分析し、確かな学力の育成を目指した。</p>	<p>算数を窓口教科とし、「内容ベースから資質・能力ベースへの授業転換」「授業転換を支える単元デザイン力」の二つを意識することで、教師の授業力を高め、子供の確かな学力を育成する研究を行った。</p> <p>特に、今までの授業観を抜本的に見直し、目指す授業を確認・共有した。</p>
取組	<p>(1) 授業改善Ⅰ「すべての子供にこだわる授業」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の最初から教師が説明しない授業を意識。 ・子供たちの「問い」を大切にし、子供同士で説明し合う授業の転換を図るとともに、「思考力、判断力、表現力等」の育成につなげた。 ・45分の授業の構成の中で、「導入部分をシンプルにする」「必ず自分で考える時間の確保をする」「みんなで考える課題を明確にする」「振り返りの重要性（特に算数は適用問題を必ず入れる）」を基本としたタイムマネジメントの共通理解。 ・1年生から6年生までの学力を経年的に分析し、学習内容がわからない子供が増える現状を減らし、すべての子供たちが力をつけていく研修を重ねた。 <p>(2) 授業改善Ⅱ「学びを深める夢中にこだわる授業」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供たちが、主体的に学習を進めていくために子供たち同士が聴き合う関係があることの重要性を確認し、段階的な「話す・聴く表」の提示を行った。 ・単元計画中心のつきたい力を意識した授業づくりを意識化した。 ・向かうべき授業の共有化を図り、「集団としての子供たちの成長」と「教師の導く役割」について議論を行うなど、教育委員会からのサポートを受け、確かな研修体制を確立した。 	<p>(1) 校内研修の充実による授業改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全教員が、一人1回以上の授業公開。 ・中心授業を通しての授業改善。 <p>(2) 資質能力ベース授業への転換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「算数の授業を通して、〇〇な力をつける。」ことが授業のゴールとなっているかに着目した話合いの実施。 ・市内研修主任参加の授業改善推進委員会を年5回開催 <p>(3) 授業転換を支える単元デザインの工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供の実態や思考を考えながら、単元全体を組み立てていくことが必要であると考えた。 ・子供たちが生活の中で培ってきている「数学的な見方・考え方」を価値づけ、さまざまな単元で「数学的な見方・考え方」を働かせて課題を解決していけるように育成していく授業を目指した。 <p>(4) 学びの土台づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供の筆入れの中身をそろえたり、ノートの取り方のガイドラインを示したりする等、学ぶ環境づくりを子供、家庭と共有。 <p>(5) 子供の現状と課題把握</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合質問紙調査 i-check を全校で2回行い、全職員で結果分析を行い、学級経営に活かした。 ・算数の標準学力調査を5年生対象に実施し、教員が単元ごとの理解度を把握し、授業に活かした。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 熱海市立第一小学校の取組の成果

- ・全国・学力学習状況調査においては、国語・算数ともに、例年から比較すると大幅に上昇し、全国平均を上回った。
- ・県の定着度調査（令和2年1月に実施）では、国語・算数ともに良好な結果が得られた。例年と比較しても、学習した内容が概ね定着していることが伺える。
- ・質問紙等の結果から、子供の学ぶ意欲が高まっていることが分かる。主体的な学習が進んでいること伺える。

(2) 御前崎市立第一小学校の取組の成果

- ・全国学力・学習状況調査が開始されて以来、初めて国語・算数ともに全国、県の平均正答率を上回った。
- ・学校評価における子供の自己評価では、授業への取組が良好なことが伺える。
- ・授業中、数学的な見方・考え方が働いていたり、子供同士で学び合ったりする子供の姿が見られるようになった。

2. 実践研究全体の成果

年2回開催された学力向上推進協議会にて、推進地域、推進地区、協力校の取組を検証した。協力校においては、研究が進むにつれ、子供の学力が着実に向上していることが分かり、それぞれの取組が確かな結果を伴っていることが確認された。県の示した授業改善の理念のもと、推進地区の研修や学校支援が行われ、協力校の新学習指導要領に対応した授業が推進されている点は大きな成果である。

3. 取組の成果の普及

協力校の取組は、インターネットで広く情報提供されるとともに、成果を公開授業という形で発表することで、参観した教員に共有された。

また、年度末には、取組をまとめた報告書を各学校に配信し、成果を普及する予定である。

○ 今後の課題

現在、事業終了に伴い、来年度の学力向上推進プロジェクト事業の在り方等の検討がなされている。

また、各学校が、子供の学力向上に向けて、独自の取組を行うようになってきたことに伴い、現在行われている「全国学力・学習状況調査等を活用した『P D C A』改善サイクル」が、学校の実態にそぐわない点も浮上している。改良が必須である。

静岡県としての経年的な課題に対して、今までの推進地区、協力校の取組を普及・推進させること等で改善を促すとともに、更なる改善プランをまとめ、啓発していく。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	静岡県	番号	22
-------	-----	----	----

推進地区名	御前崎市
-------	------

○ 推進地区として実施した取組内容

1 研究課題

- (1) 「育成すべき資質・能力を明確にした授業づくり」の推進
- (2) 客観的データに基づいた学力課題の洗い出しと対応方法・解消方法の提案
- (3) 家庭地域を巻きこんだ児童生徒の基本的生活習慣の確立（継続）

2 研究課題への取組状況

(1) 「育成すべき資質・能力を明確にした授業づくり」推進

ア 御前崎市授業改善テーマ「育成すべき資質・能力を明確にした〇〇科授業づくり」の視点に立った校内研修支援

- ・上智大学奈須正裕教授を招いての校内研修を市内5校で行った。

イ 御前崎市スクラム研究会（市内園・小・中・高の職員による合同授業研修）

目指す授業の方向と子供観の共有を目的に、市内教職員参加のスクラム研究会を開催した。

- ・中・高等学校スクラム研究会（11月7日県立池新田高等学校会場）

池新田高等学校校内研修テーマ「授業改善を通じた生徒の資質・能力の向上及び教員の資質向上による学校改善」に沿って、事前の授業案検討会を行った。

（8月1日）

- ・小学校スクラム研究会（11月27日 第一小学校 兼：国指定研究発表会）

ウ 授業改善推進委員会

- ・市内小中学校の全研修主任参加の研修会（年間5回）
- ・市内全小学校が研修の窓口教科を「算数」とし、育成すべき資質・能力が何かを共有した。

(2) 客観的データに基づいた課題の洗い出しと対応方法・解消方法の提案

ア 全国学力・学習状況調査の早期対応（市内すべての小中学校）

- ・市全体の傾向等を分析してリーフレットの形にまとめ、各校・保護者に配布した。各校でも早期対応で分析をし、保護者にも公表した。
- ・市内研修主任の会において、全国学力・学習状況調査、標準学力調査の分析結果を解釈し、御前崎市の子供たちに必要な資質・能力について確認した。

イ 標準学力調査（東京書籍）国語科・算数科の活用（市内全小学2～5年生）

調査結果から学力に関する課題を把握・分析した。また、静岡大学村山功教授に調査結果を分析していただき、市内研修主任の会で報告をいただいた。

【分析結果】

- ・算数では、基礎はできているのに活用ができていない児童が多い。
- ・国語の力はあるのに、算数的な考え方ができない。
- ・家庭学習時間は全国平均を上回っている。

(3) 家庭地域を巻きこんだ子供の基本的な生活習慣の確立（継続）

スクラムスクール運営協議会（御前崎版コミュニティスクール）は、平成29年度から取り組んできた「早寝・早起き・朝ごはん」の推奨に加えて、令和元年度は「ネット依存・ゲーム障害から子供を守る取組み」を行なった。

ア 「青少年の未来をつむぐ集い」（社会教育課主催）でネット依存に関する講演会を実施

イ 御前崎市大産業祭りでの「早寝・早起き・朝ごはん」ブース出展による広報

ウ 青少年健全育成地区懇談会での教育委員会職員によるネット依存に関する講演

エ 各園の保護者懇談会でネットによる害等について紹介

オ 各小中学校のPTAによる広報活動

カ 各園小中学校の保護者向けのよりによる広報

キ 市学校組合生徒指導主任・主事研修会において川島隆太教授講演「子供の脳の発達と読書」の伝達と市内小中学校インターネットアンケートの結果報告

ク 全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果の分析と結果公表

ケ 園保護者に対して朝ごはんの推奨「ネット障害・ゲーム依存」についての講話

3 実践研究の成果の把握・検証

(1) 全国学力・学習状況調査と標準学力調査（東京書籍）の結果

ア 全国学力・学習状況調査のH30とH31の比較

教科		小学校		中学校	
		H30	H31	H30	H31
国語	A	●	◎	△	○
	B	●		○	
算数 数学	A	●	○	▲	△
	B	●		●	
理科・英語		● (理)		▲ (理)	○ (英)

小学校・中学校ともに平成30年度は全国平均正答率を大きく下回っていたが、平成31年度は、上回る結果となった。

全国平均正答率と比較して
 ◎ 4ポイント以上高い
 ○ 1ポイント以上4ポイント未満
 △ 2ポイント以上-1ポイント未満
 ▲ 4ポイント以上-2ポイント未満
 ● 4ポイント未満

イ 標準学力調査結果の結果（H30 小学校5年）

平成30年度は、第一小学校を含む御前崎市の3校の小学5年生が標準学力調査（算数）を実施した結果、平均正答率が全国比較約-5ポイントだった。

平成 31 年度の全国学力・学習状況調査の小学校算数では、5 年生から 6 年生へ進級した子供の正答率が大きく伸びる結果となった。

(2) 標準学力調査 (H30 小学 5 年) と全国学力・学習状況調査 (H30・31) の設問ごとの比較

ア 全国学力・学習状況調査 (H30) 課題となった問題

正答率の差が全国平均と比べて大きく下回っている問題を取り上げたところ、小学校は「二つの数量の関係」や「1に当たる大きさ」をとらえることに大きな課題があることがわかった。同様に、中学校も「関数」に関する問題に課題があり、小中共通の課題があることがわかった。

【小学校】

※数値は、小数第 1 位を四捨五入して表している。

問題 番号	問題の概要	出題の趣旨	全国	市	
			正答率		差
1 (1)	針金 0.2 m の重さと針金 0.1 m の重さを書く	除法で表すことができる 二つの数量の関係を理解 している	63	53	-10
1 (2)	針金 0.4 m と、0.4 m の重さの 60 g と、1 m の重さがそれぞれ数直線上のどこに当てはまるかを選ぶ	1 に当たる大きさを求める問題場面における 数量の関係を理解 し、数直線上に表すことができる	67	53	-14
1 (4)	針金 1 m の重さを求める式を選ぶ	1 に当たる大きさ を求める問題では、除数が小数である場合でも除法を用いることを理解している	65	57	-8
2	答えが $12 \div 0.8$ の式で求められる問題を選ぶ	小数の除法の意味 について理解している	40	34	-6
8	200 人のうち 80 人が小学生のとき、小学生の人数は全体の人数の何%かを選ぶ	百分率 を求めることができる	53	38	-15

【中学校】

3 (1)	一元一次方程式 $6x - 3 = 9$ を解く際、用いられている等式の性質を選ぶ	方程式を解く場面における 等式の性質 の使い方について理解している	64	59	-5
9 (1)	比例 $y = 5x$ について、正しい記述を選ぶ	比例 $y = ax$ における 比例定数 a の意味 を理解している	66	59	-7

イ 標準学力調査（H30 小学5年）課題となった問題

全国学力・学習状況調査と同様に、「二つの数量の関係」をとらえることに課題がみられた。

問題 番号	問題の概要	出題の趣旨	全国		市	
			正答率		正答率	差
7 (1)	赤いテープの長さの5倍の青いテープの長さは350cm。赤いテープの長さ図に表すと、どのようになるかを選ぶ	倍とわり算の 文章問題を表した図を理解 している	73		67	-6
7 (2)	赤いテープの長さを求める式を選ぶ	図を使って、倍とわり算の 文章問題に合った式を選ぶ ことができる	76		68	-8
15 (1)	マッチ棒14本を使って長方形を作る。縦6本の時の横の本数を求める	伴って変わる2つの数量 の一方の値からもう一方の値を求めることができる	84		75	-9
15 (2)	縦□本、横○本として、□と○の関係を式に表す	伴って変わる 2つの数量の関係を式に表す ことができる	42		9	-33

ウ 全国学力・学習状況調査（H31）で全国平均正答率を上回った問題

先のア・イで述べた課題となった問題と下表の問題を比較すると、課題となっていた「二つの数量の関係」に関する問題の正答率が全国平均を上回っている。これは、平成30年度の学調や標準学力調査の結果を受けて、授業改善をした結果ととらえることができる。

2 (3)	二つの棒グラフから、一人当たりの水の使用量についてわかることを選び、選んだわけを書く	資料の特徴や傾向を関連付けて、 一人当たりの水の使用量の増減 を判断し、その理由を記述できる	52		59	7
4 (1)	だいたい何分後に乗り物券を買う順番がくるのかを知るために、調べる必要のある事柄を選ぶ	目的に適した 伴って変わる二つの数量 を見いだすことができる	83		85	2

エ 全国学力・学習状況調査（H31）課題となった問題

平成30年度の課題となった問題と同様に、「二つの数量の関係」をとらえることや「計算の意味の理解」や「計算の仕方の解釈」等に課題があることがわかった。しかし、全国平均との差が大きく開く問題は減り、正答率の差も小さくなった。

2 (4)	洗顔と歯みがきで使う水の量を求めるために、 $6 + 0.5 \times 2$ を計算する	加法と乗法の混合した整数と小数の計算をすることができる	60		55	-5
3 (4)	$1800 \div 6$ は、何m分の代金を求めている式といえるのかを選ぶ	示された 除法の式の意味 を理解している	47		43	-4

1 (3)	減法の式が、示された形の面積をどのように求めているのかを、数や演算の表す内容に着目して書く	示された図形の 面積の求め方を解釈 し、その 求め方の説明を記述できる	44	45	1
3 (2)	減法の計算の仕方についてまとめたことを基に、除法の計算の仕方についてまとめると、どのようになるのか書く	示された 計算の仕方を解釈 し、減法の場合を基に、 除法に関して成り立つ性質を記述できる	31	32	1

(3) 「育成すべき資質・能力を明確にした授業づくり」の推進

ア 市内小学校全校が研修窓口教科を「算数科」としたことにより、県サポートチームの支援を市内全体で受けることが可能となり、学校間での情報共有がスムーズに行われ、授業改善が広がった。

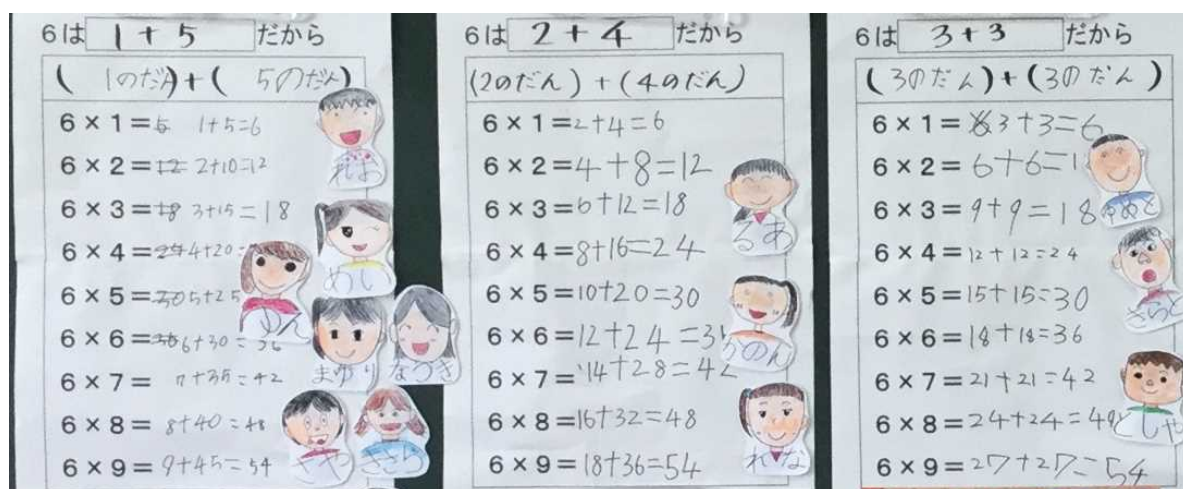
イ 市研修主任会における各校の具体的な研修内容の情報交換

以下に示すような、市の授業改善テーマに向かっている具体的な実践が各校で見られた。このことについて、市研修主任者会で情報共有を行った。

- ・算数科で育成すべき資質・能力を明確にした授業（浜岡東小学校9月27日）

「単に乗法九九を暗記するのではなく、性質やきまりを生かして、知っている九九を手掛かりに積を構成したり、計算を工夫したりする中で、数学のよさに気付き、・・・」（授業案の単元構想の一部抜粋）

5・2・3・4の段のかけ算の学習の既習から、未習である6の段以降のかけ算の答えを出す数学的活動を通して、6の段以降のかけ算について理解し、結合法則や分配法則を獲得することを狙った授業。算数科の目標である統合的・発展的に考察する力が育成される授業が展開されていた。



・授業案の形式の変化（白羽小学校 11月6日）

単元の指導計画を「学習内容」「働かせたい数学的な見方・考え方」「育成する資質・能力」の3つの項目に変更した。今までは、「学習した結果、問題を解くことができるか。」に着眼しがちだったが、「見方・考え方」を加えたことで、学習の過程で大事にしたいことを授業者が意識し、子供の姿をとらえた適切な形成的評価をする場面が見られるようになった。

5 単元の指導計画

時	学習内容	働かせたい数学的な見方・考え方	育成する資質・能力
1	・減法の用いられる場面（求残）であることに気づき、ブロックを使って12-9の計算のしかたを考える。	㊦2から9は引けないことに着目する。 ㊧数え引くことや10のまとまりから9を引く方法を考える。	・12は10と2だから、10から9を引いて1。 1と2をたして3になるから答えは3になることが分かる。（減加法）
2	・前時の学習を生かして13-8の計算のしかたを考える。 ・繰り下がりのある減法の計算をする。	㊦3から8は引けないことに着目する。 ㊧10のまとまりから8を引く方法を考える。	・10のまとまりに着目して計算のしかたを考え、ブロックを使って説明することができる。
3 本時	・11-2の計算のしかたを考える。 ・減加法と減々法を比べながら説明する。	㊦被減数が11で減数が2であることに着目する。 ㊧被減数の一の位と減数が小さいことから、まず1を引いてさらに1を引く方法を考える。（減々法）	・減加法と比べながら考えることで、減々法のしかたを理解し、ブロックを使って説明することができる。
4	・14-6についていろいろな計算のしかたを考え、ブロックや式を使って説明	㊦被減数の一の位や減数が5に近い数であることに着目する。 ㊧既習事項（減加法・減々法）を	・既習事項（減加法・減々法）を使って考え、それぞれの計算のしかたの理解を深める。

・単元を貫く見方・考え方の設定（第一小学校 11月27日）

5年生「図形の面積」の単元

「図形の構成要素や位置関係に着目し、求積可能な図形にして求め方を考える」

単元を通して子供が働かせる数学的な見方・考え方を授業案に記載した。本時では、見方・考え方を働かせながら、台形の面積の公式を作り出す資質・能力を育むことを目標とした授業を行った。現行学習指導要領では、B量と測定の領域であった5年生面積の内容が、新学習指導要領では、B図形領域になり、「図形を構成する要素などに着目して、図形の性質を考察したり、それを活用したりする資質・能力を育む」領域となった。このことについては、県のサポートチーム講師の御指導を受け、第一小が理解をして改善した。

授業者から単元終了後に次のような話を聞くことができた。「過去に本単元を行ったときは、まず平行四辺形の面積の求め方を考え、次に三角形の面積の求め方、次は…といったように、一時間毎、完結してしまっていた。しかし今回は、見方・考え方を子供たちが意識することで、平行四辺形の授業で働かせた見方・考え方を次の三角形の授業でも働かせ、次の台形の授業でも…といったように主体的に学び、それが資質・能力を育むことにつながっていた。」

算数科学習指導案 第5学年 単元名「図形の面積」

1 単元で育む資質・能力

生きて働く「知識・技能」	思考	単元デザインの工夫の一つとして、単元を貫いて働かせたい見方・考え方を記載した。
三角形、平行四辺形、ひし形、台形の面積の計算による求め方について理解すること。	図形を構成 本図形の面 に、その表現を振り返り、簡潔かつ的確な表現に高め、公式として導くこと。	
		く考える態度、数字のよさに気付き、学習したことを生活や学習に活用しようとする態度。

2 単元計画及び働かせたい見方・考え方

		1年	2年	3年	4年
図形	見方	図形の構成要素に着目する			
	考え方	もの形	辺・頂点の数	等辺・等長	垂直・平行
測定	見方	身のまわりの物の特徴に着目する			
	考え方	長さ・広さ・かさ (任意単位)	長さ・かさ (普通単位)	長さ・かさ・重さの単位	面積の単位
	考え方	量の比較方法を見出す	単位で強の大きさを表現・比較する	単位の関係を統合的に考える	求め方を考える

① 単元の問題把握 正方形でもない長方形でもない面積を求めよう。

平行四辺形を長方形に見立てて面積を求める方法を考えよう。
・垂直を利用して既習の図形に結び付ける力 ・図形を式に表す考え方の獲得

②③ 平行四辺形の求積公式

・平行四辺形の求積公式 ・高さがない平行四辺形の面積

④⑤ 三角形の求積

三角形の面積は、どのように求めればよいだろう。

・既習の図形に変形する ・三角形の求積公式 ・高さがない三角形の面積

⑥ 台形の求積

台形の面積はどのように求めればよいだろう。

・既習の図形に変形する
・台形の求積公式

⑦⑧ ひし形の求積

ひし形の面積は、どのように求めればよいだろう。

・既習の図形に変形する
・ひし形の求積公式

⑨ 一般的な四角形の求積

複雑な図形をどう見れば求積できる？

・既習の図形に結び付ける力の拡充

⑩ 比例関係の認識

高さとの面積の関係にはルールがあるのかな。

・高さが増えれば面積も増える。

⑪ 面積の学習を振り返ろう

6年 円の求積・楕円とおよその面積

【目標】

図形の一部をずらして既習の図形として見たり、既習の図形の半分として見たり、既習の図形に分割して見たりして面積の求め方を考えることができる。①③④⑥⑦

三角形、平行四辺形、ひし形、台形の面積の計算による求め方について理解し、式に表したり、公式を使って面積を求めたりすることができる。②⑤⑧

既習内容や公式を用いて、未知なる一般四角形や多角形の面積を求めようとするとともに、簡潔・明瞭・的確という視点から、問題場面に応じた解決の方法を考えようとする。既習の面積の求め方を三角形、平行四辺形、ひし形、台形の求積に活用する。⑨⑩

図形の構成要素や位置関係に着目し、求積可能な図形にして求め方を考える

(4) 家庭地域を巻きこんだ子供たちの基本的な生活習慣の確立を目指した取組

スクラムスクール運営協議会（御前崎版コミュニティスクール）の活動が広がり、地域・家庭・学校・園・行政が一体となった取組が行われている。

ア 「朝食を毎日食べている。」の割合が向上（全国学力・学習状況調査比較）

※添付資料「平成31年度全国学力・学習状況調査結果概要」参照

イ 社会教育課主催の行事でネット依存に関する講演会を行ったり、健康づくり課が「早寝・早起き・朝ごはん」の推進の取組みに協力して、朝ごはんレシピを紹介したりと、行政が一体となった取組みが行われている。

ウ 令和2年度には、「ネット依存・ゲーム障害から子供を守る取組み」の一つとして、小学校区で園と小学校が合同で高学年と保護者を対象とした講演会を計画している。また、中学校でも生徒と保護者対象の講演会を実施する。

エ 様々な場面での広報活動により、地域の方や園・小中学校保護者に、ネット（スマホ）使用における害についての情報が伝わっている。

4 今後の課題

(1) 「育成すべき資質・能力を明確にした授業づくり」推進

ア 「3 実践研究の成果の把握・検証」の「(2) 標準学力調査（H30 小学5年）と全国学力・学習状況調査（H30・31）の設問ごとの比較」の表に示されているように、どの調査でも同じ領域の問題が課題となっている。来年度は、標準学力調査（国語・算数（数学））を小学2年生から5年生までと中学1・2年生で実施し、小学2年生から中学3年生までの学力を把握する。分析結果から課題をさらに明らかにし、授業改善につなげていきたい。

イ コンテンツベースからコンピテンシーベースへの授業改善が、第一小学校を中心に進んできているが、市内全域の教職員に深く浸透しているとは言えない。今後、さらなる授業改善とともに、「育成すべき資質・能力を明確にした授業づくり」の推進を市内全体に広めていきたい。

ウ 小学校は「算数科」を共通の窓口教科として市内小学校の研修内容を共有させることで、授業改善を推進させることができたが、中学校に関しては、市として授業改善のサポートに寄与することがあまりできていない。中学校の授業改善へのサポートは今後の課題である。

(2) 家庭地域を巻きこんだ児童生徒の基本的な生活習慣の確立

下記のア・イを課題として捉えている。スクラムスクール運営協議会（御前崎市版コミュニティスクール）を中心として、地域・家庭・学校・園・行政が一体となった取組みにより解決を目指していく。それによって、子供たちの規則正しい生活習慣が確立され、力を最大限に発揮することができるようになることを願っている。

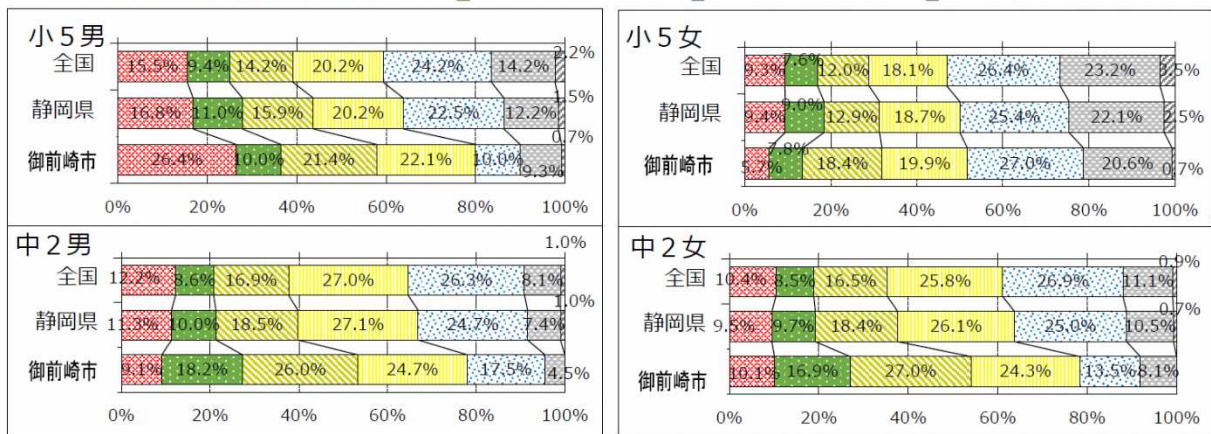
ア 早寝・早起き

平成 31 年度全国学力・学習状況調査で「毎日同じ時刻に寝ている。毎日同じ時刻に起きている。」と答えた小学生の割合が全国平均に比べて低い結果であった。※添付資料「平成 31 年度全国学力・学習状況調査結果概要」参照

イ 適切なメディアの利用

「令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」では、グラフ 1 に示すように、小学校・中学校共に「テレビやスマホ等の視聴時間が 3 時間以上」の割合が全国・県に比べ高かった。(H30 も同様に高かった)

【グラフ1】「平日(月～金曜日)について聞きます。学校以外で、1日にどのくらいの時間、テレビやDVD、ゲーム機、スマートフォン、パソコンなどの画面を見ていますか。」



「生活」に関する調査結果

肯定的に答えた割合が全国平均に比べ高かった項目(良好)と、大きく低かった項目(課題)を紹介します。

良好

- 「ものごとを最後までやりとげてうれしかったことがある」中学校
- 「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」中学校
- 「今住んでいる地域の行事に参加している」小・中学校

課題

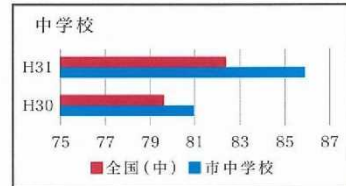
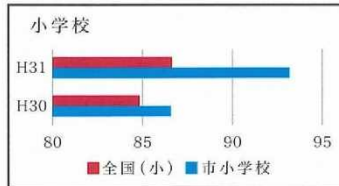
- 「授業以外で学校図書室や地域の図書館に週1回以上行く」小・中学校
- 「新聞をほぼ毎日、または週1～3回以上読んでいる」小学校

良好 朝食を毎日食べている。

昨年度と比較すると、今年度の「朝食を毎日食べている」と答えた割合が高いことが分かります。また、全国平均と比較しても、かなり高い数値となりました。

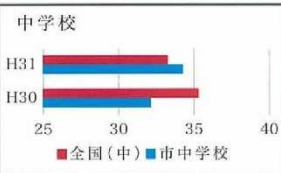
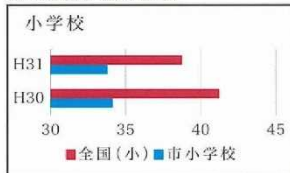
昨年度から園や学校を通して、「早寝・早起き・朝ごはん」の推進に関する活動を行ってきました。

昨年度から意識してくださったおかげで、このような結果となりました。御協力ありがとうございました。引き続き、子どもたちが自分の可能性を最大限発揮できるように、朝ごはんの大切さを訴えていきます。

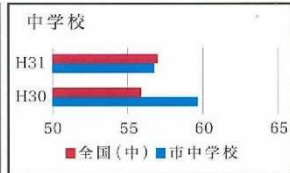
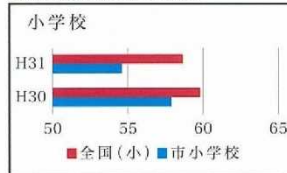


課題 毎日同じ時刻に寝ている・毎日同じ時刻に起きている。

同じ時刻に寝ている



同じ時刻に起きている



結果から「毎日同じ時刻に寝ている」「毎日同じ時刻に起きている」と答えた小学生の割合が、全国平均に比べて低いことが分かります。原因の一つとしては、スマホやゲーム等のネット利用が考えられます。昨年度末に採ったアンケート結果では、平日の夜9時以降にインターネット等を利用する児童の割合は小学生全体の約20%、また、平日3時間以上スマホやゲーム等のネットを利用する児童は、約17%でした。

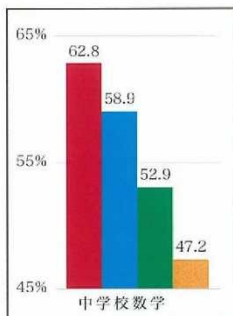
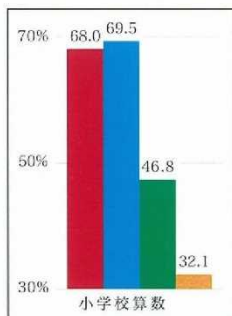
今年度のスクラムスクール運営協議会の重点は、「ネット依存・ゲーム障害」から子どもを守る対策です。ネットのよさはもちろんありますが、子どもたちが負の部分についても理解することで、ネットのよりよい活用ができるようになってほしいです。

「学習」と「生活」に関する調査結果クロス集計



「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」への回答と正答率の関係(左)

「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」への回答と正答率の関係(右)



「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」「寝ていますか」の質問に対し、肯定的に答えている子どもの方が、算数・数学の平均正答率が高い傾向がありました。

このことから、規則正しい生活習慣が、子どもの力を最大限に発揮することができる要因となっていると考えられます。

御前崎市では、園・学校全体で「早寝・早起き・朝ごはん」をどの御家庭も意識して取り組むよう、児童・生徒そして園から中学校の保護者のみなさんに、引き続き呼びかけていきます。

ネット依存・ゲーム障害から子どもを守る取組み

青少年の未来をつむぐつどい

日時：11月17日(日) 午前10時から

場所：御前崎市民会館

演題：(仮)身近なメディアが脳におよぼす危険性
今、問われるコミュニケーションの重要性

講演：今井昌彦氏 浜松学院大学短期大学部 教授

参加
無料

調査問題の答え ①1横 ②対象 ③と思います。そこで、わたしは、 ④い

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度 委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	静岡県	番号	22
-------	-----	----	----

推進地区名	熱海市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

- ・子供がなりたい自分の姿を目指し、主体的に追究し続け、表現することができる力の育成
- ・教師がこれまでの教育実践を大切にしながらも、将来を生きる子供たちのために、授業改善し続ける教師集団の育成

2. 研究課題への取組状況

(1) 熱海市全国学力・学習状況調査検証委員会による結果の分析

学力等についての現状を把握して分析するために、全国学力・学習状況調査後「熱海市全国学力・学習状況調査検証委員会」を開催した。その中で、今年度の結果を分析し、具体的な課題と市内共通の授業改善の視点をリーフレットにまとめた。

リーフレットのまとめでは、本調査の出題傾向を、新学習指導要領で求められている資質・能力との関連で説明した。その上で、熱海市の子供たちの実態を踏まえ、現在移行期の新学習指導要領の確実な実施に向けた準備について市内の教職員への周知を行った。

(2) 学力向上委員会の開催による各校の校内研修体制への支援

各校の校内研修をリードする研修主任を集め、学力向上委員会を開催した。

<第1回（5月）>

これまでの静岡県学力向上推進協議会および学力向上連絡協議会の内容を伝達した。また、静岡県教師用指導資料「自分ごと（自分の事）として学ぶ子供」の説明を行い、研究授業における学び手を中心とした授業の見方など、学び手の視点で校内研修をコーディネートするための研修を行った。各校ごとの情報交換では、組織体としての研修に取り組むことについて、PDCA サイクルを意識した校内研修について協議した。

<第2回（11月）>

市指定研究校の多賀中学校が中間発表を行った。研修主任自身が複数年に渡るビジョンを描きながら校内研修をけん引すること、また PDCA サイクルを回しながら状況によって柔軟に研修計画を更新することなど、研修主任として期待される役割を確認した。

(3) 「学び続ける教師のチェックシート」の実施

静岡県教育指標に照らし、「授業力」「生徒指導力」「業務遂行力や組織運営力」の3観点で

自己評価を行い、教師の資質向上の視点として分析を行った。特に、今年度は教師用指導資料「自分ごと（自分の事）として学ぶ子供」の関連設問を新たに追加調査を行った。

(4) 市内小中学校への支援と連携

<協力校（第一小）への支援>

県教育委員会サポートチーム派遣として、静東教育事務所の指導主事による指導を依頼した。協力校での研究授業を参観し、「自分ごと（自分の事）で学ぶ子供」を育てるための授業づくりについて指導・助言をいただいた。また、横浜国立大学の高木教授や静岡大学の村山教授にも講師として助言いただき、新学習指導要領の理念に沿った授業改善の方向性など御示唆いただいた。

市教育委員会指導主事も授業参観を行い、全国学力・学習状況調査に基づく国語の<読むこと>での授業づくりについて、第一小における好事例を市内で共有できるよう努めた。特に、作品を丸ごと俯瞰的に読もうとする授業展開は、今後も第一小モデルとして市内でも広めていきたい。

<市内各校への指導主事派遣支援>

市指導主事が各校への指導訪問を行い、各校の研修推進の状況を随時確認しながら校内研修の在り方について助言を行った。特に令和元年度は、市指定研究校（第二小）に対して重点的に支援を行い、研究発表に向けての指導案検討などで助言を行った。

(5) 地域・保護者への啓発

全国学力・学習状況調査の結果を分析し、学校と地域・保護者が課題を共有するためのリーフレットを作成した。生活習慣の改善や自主的な学習への意識付けのため、リーフレットは保護者に配布するとともに、熱海市ホームページに掲載した。（以下は、その一部）

【中学校】生活習慣・学習環境等
本年度の全国学力・学習状況調査に見られる熱海の中学生の現状について、全国と比較してみました。

A. 本に親しむ生徒が多くいます！

① 読書が好きな生徒、読書が好きなことを話せる生徒の割合

項目	熱海市	全国
読書が好きな生徒	72%	60%
読書が好きなことを話せる生徒	72%	60%

② 読書の量が増え、最後まで読めるようになった生徒の割合

項目	熱海市	全国
読書の量が増え、最後まで読めるようになった生徒	72%	60%

熱海の中学生は、本に親しむ生徒が全国に比べて高いことが分かります。学校でも「読書」を取り入れている学校がほとんどです。読書する時間が増えることで、集中力・読解力の増加にもつながっています。また、文章力をつけることにもつながります。読書習慣の『読書の量を増やして最後まで読めることと読書が好き』という生徒の割合が、全国を上回る結果になったことも、本に親しむことのよさがつながっていると言えるかもしれません。

B. 協力して取り組むことに対して、頑張れる生徒が多いです！

① 学校みんなで取り組むことなどに協力して取り組む、それができたことがあつた生徒の割合、（読書、読書が好きなことに関する割合）

項目	熱海市	全国
学校みんなで取り組むことなどに協力して取り組む、それができたことがあつた生徒	72%	60%

話し合いは、他者と関わる力、自主的・主体的な力を身につけることにつながります。また「誰かのために頑張る」という「協力して取り組む」とは、進歩や向上を促すことにもつながります。今回の結果のように、集団の中で協力して取り組むことのできる生徒がさらに増えるようにしていきたいです。

C. 朝食を食べている生徒が多くいます！

① 朝食を毎日食べる生徒の割合、（読書、読書が好きなことに関する割合）

項目	熱海市	全国
朝食を毎日食べる生徒	95%	90%

脳や身体を活動し、そして集中力を高めるためには朝食は必要不可欠です！保護者の協力もあり、熱海市では多くの中学生が朝食を食べることができています。引き続き、食生活をよりよくお願いします。

D. 部活動に向上心をもって取り組んでいる生徒が多いです！

① 学校の部活動に参加する理由がどれですか

理由	熱海市	全国
部活動に前向きに取り組んでいる様子が伝わります。活動を楽しんでいることは全国平均以上ですが、目的意識と向上心をもって行っていることがグラフからわかります。それに耐え、自己を高めるために真面目に努力を続けることができています。	72%	60%

② 家で、自分で計画を立てて勉強している生徒の割合

項目	熱海市	全国
家で、自分で計画を立てて勉強している生徒	72%	60%

③ 学校の授業以外に、平日2時間以上学習をしている生徒の割合

項目	熱海市	全国
学校の授業以外に、平日2時間以上学習をしている生徒	72%	60%

これからの時代は、主体的かつ計画的に学習する力が、今まで以上に求められています。昨年度に引き続き、この点において課題が指摘されました。まずは短時間からでもよいので、自分で計画を立て、実行する習慣を身につけることが大切です。また熱海の中学生の部活動の時間は、全国のそれよりも少なくなっています。自分で過ごすことができる貴重な時間を有意義に使えるようご家庭でのご協力をお願いします。

E. 自己肯定感が低い傾向が見られます！

① 自分に、よいところがある生徒の割合

項目	熱海市	全国
自分に、よいところがある生徒	72%	60%

熱海の60%の生徒が自分にはよいところがあると思っています。全国の平均は70%です。どの子にもその子の長きがあり、自分では気づきにくいこともありますが、周囲の人々が積極的にその子の長きをほめ、認めていくことで、また自信の芽生えも増えるようになっていきます。プラスの声かけが子どもたちの可能性を広げると信じ、日々の見守りがサポートをお願ひできると幸いです。

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 全校学力・学習状況調査の経年比較と今年度の結果

全国の平均正答率と熱海市の平均正答率を比較した。

◎高い：+3ポイントを上回る ○やや高い：+1から+3 同じ程度：±1ポイント以内
 △やや低い：-1から-3 ▲低い：-3ポイントを下回る

実施年度	校種	国語A	国語B	算数数学A	算数数学B
平成26年	小学校（全国比）	◎	◎	◎	○
平成27年	小学校（全国比）	◎	○	◎	◎
平成28年	小学校（全国比）	○	○	同じ程度	同じ程度
平成29年	小学校（全国比）	▲	△	△	△
平成30年	小学校（全国比）	△	同じ程度	○	同じ程度
令和元年	小学校（全国比）	同じ程度		△	
平成30年	中学校（全国比）	同じ程度	▲	同じ程度	同じ程度

令和元年度は、中学校の国語と数学がともに全国の平均正答率と比較して良好な結果となった。義務教育最終学年の中学3年生で成果が表れたことは、小・中学校での授業改善が一定程度進んでいるものと考えられる。

(2) 全国学力・学習状況調査における小・中学校の国語の分析について

国語・正答率		読むこと		記述問題	
小学校	H30	市 A76.1 B48.3	(全国 A74.0 B50.8)	市 36.3	(全国 33.2)
	R1	市 83.0	(全国 81.7)	市 61.5	(全国 57.6)
中学校	H30	市 A78.9 B56.6	(全国 A76.7 B53.5)	市 54.8	(全国 50.3)
	R1	市 77.4	(全国 72.2)	市 77.4	(全国 76.5)

特に、ここ数年の課題であった国語において、小・中学校ともに上向きの傾向が見られた。設問別の正答率では、特に「読むこと」また記述問題でその成果が表れた。このことは、第一小でも取り組まれている「作品全体に問いを見出す」「作品を丸ごと読みとる」といった授業展開が意識され、場面読みから俯瞰で捉える読み方に授業改善が進んできた成果であると考えられる。今後も授業改善を進め、「実生活に転移できる読みの力」の育成を目指すことが必要であると考えられる。

(3) 全国学力・学習状況調査における質問紙への回答について

生活習慣や学習習慣について、全国と比べて特徴的な以下の点が明らかになった。

<小・中共通>

- ・学級みんなで話し合っ決めてことなどに協力して取り組み、達成感を得ている。
- ・難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦している子供の割合が低い。

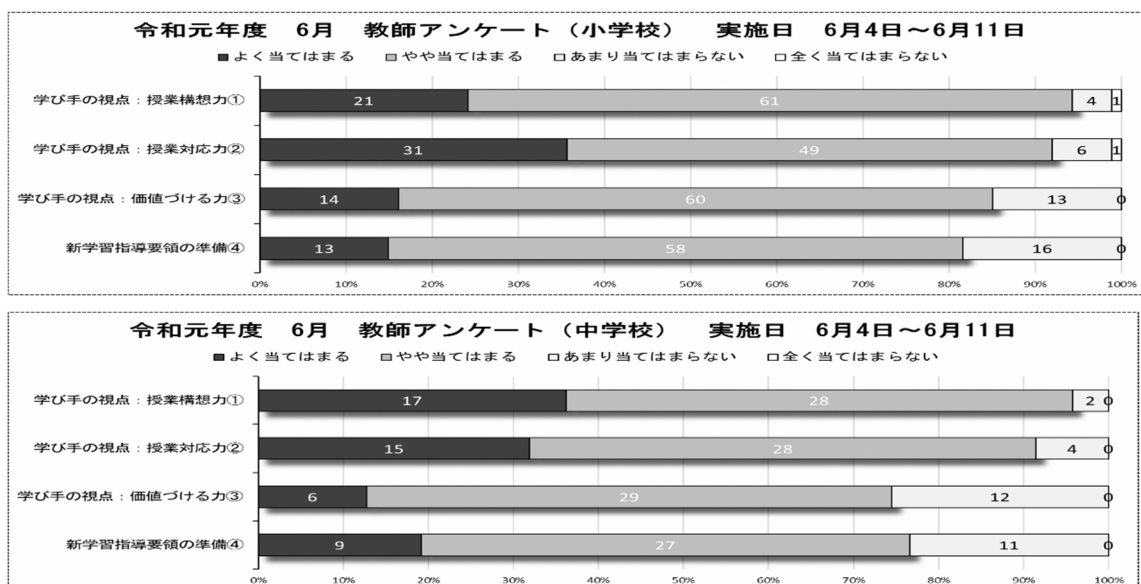
<小学校>

- ・すんでいる地域の行事に参加している子供が多い。
- ・先生は分かるまで教えてくれると考えている子供の割合が高い。

<中学校>

- ・協力して取り組むことに対して、頑張れる生徒が多い。
- ・「読書は好き」と回答した子供の割合が高く、読書に親しんでいる。

(4) 「学び続ける教師のチェックシート」の検証



<学び手の視点：授業構想力>

小学校の「よく当てはまる」の割合が中学校に比較して低迷した。道徳の教科化や3・4年生の外国語活動、5・6年生の外国語科など、高学年を中心に担当する教科や準備する授業が増加したことも背景として考えられる。週29コマ体制を念頭に、指導する全ての教科で十分な構想を描けるよう、小学校における教育課程の見直しが求められる。

<学び手の視点：価値づける力>

「よく当てはまる」の回答が2割未満となった。子供自身が学習の状況を自覚したり、実感や手応えを感じられたりするような支援や評価が求められる。支援と評価が一体的にはたらく学習指導の在り方は、今後の校内研修の視点の1つとして求められる。

<新学習指導要領>

「よく当てはまる」の回答が2割未満となった。令和2年度の完全実施（中学校は令和3年度）に向けて、既に周知の期間を終え、今後は評価規準の作成や年間学習計画の作成等が控えている。小学校においては、外国語科への対応も最終段階に入っている。各校研修主任を中心に、確実な移行が完成するよう取組を確認していくことが必要となる。

4. 今後の課題

(1) 教育の情報化について

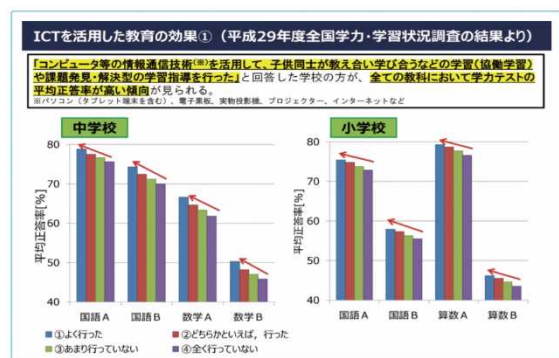
新学習指導要領では、ICTを活用した個別学習、協働学習が求められている。

今回の調査の結果から、全国に比べて、熱海市のICTの効果的な活用が遅れていることが分かる。学習者が互いの思考を可視化しながら交流できるICTの

教育のICT化		授業でICTをどの程度使用しましたか。(月1回以上)		授業でもっとICTを活用したいと思いますか	
小学校	R1	市 21.1 (全国 30.6)		市 82.6 (全国 86.5)	
中学校	R1	市 15.4 (全国 30.6)		市 80.1 (全国 78.3)	

活用は、「主体的・対話的で深い学び」が目指す授業の姿とも一致している。

現在、大規模な財政政策によって、教育の情報化に向けた学習インフラが急速に整えられようとしている。数年後に、タブレット1人1台が実現した場合、これまでの授業風景は一変する。現在、熱海市の教育のICT化には、設備面や教員の熟練度で課題がある。今後、あらゆる授業の在り方を研究して行くが、教育のICT化についても、同様に取り組む必要があると考える。



(参考資料 平成30年3月文部科学省発行「学校のICTの環境整備」より)

(2) 生活に結びつけて学ぶ力について

学習と生活 関連意識		国語		算数・数学	
		勉強は好きですか	普段の生活で活用しようとしていますか	勉強は好きですか	普段の生活で活用しようとしていますか
小学校	R1	市 61.5 (全国 64.2)	市 72.0 (全国 76.9)	市 71.5 (全国 68.6)	市 69.6 (全国 76.5)
中学校	R1	市 60.2 (全国 61.7)	市 57.7 (全国 71.6)	市 53.2 (全国 57.9)	市 73.7 ※1 (全国 76.2)

※1 代替設問「将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」

熱海市の課題として、児童生徒は授業の内容を普段の生活や社会生活に結びつけて学んでいないということが明らかになった。今回、全国平均に比べて低迷した小学校算数については、特にその傾向が顕著に表れた。

「教室での学び」が自分や自分たちの生活で活用されていることを実感できる授業展開は、今後全ての教科共通の授業改善の柱になると考えられる。普段の生活で活用したくなる学びを通して、児童・生徒は、生きて働く知識・技能の習得や学びに向かう力の涵養などを自覚的に捉えることができるのだと考える。

授業での学びが生活上の生きる力と乖離することがないように、社会や時代の変化に応じた授業改善を進め、児童生徒自身が自らの学びを調整しながら粘り強く取り組む姿を目指したい。その上で、「学ぶこと」が児童生徒にとっての、まさに「生きること」につながる授業を各小・中学校と連携しながら推進していきたい。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県市名	静岡県	番号	22
--------	-----	----	----

協力校名	御前崎市立第一小学校
------	------------

○ 協力校として実施した取組内容

1 当初の課題

かつて、生徒指導困難校とも称された本校であるが、数年間にわたる丁寧な指導の積み重ねにより、児童が学習に集中して取り組むことができるようになってきている。とはいえ、一人親家庭や外国にルーツをもつ家庭、貧困家庭などのハンデを抱えた児童が25%近く在籍しており、自尊感情の低さが目立つ。すべての子供たちの学習意欲を引き出し、継続させていくことは大きな課題である。そうした中、全国学力・学習状況調査の平均正答率では、国語、算数共に県・全国平均を大きく下回っており、正答数の分布も全体的に低い方に分布している。この状況はここ数年続いているものである。また、国語・算数ともに記述式問題での誤答率や無答の割合がきわめて高かった。

「情報量の多さに対応できない。」「問題文や資料を理解できず、あきらめてしまう。」「言葉や式を使って書く、自分の考えをまとめて書く力がついておらず、回答が不十分なために、誤答になってしまっている児童も多い。」という状況がうかがえた。

全国学力・学習状況調査正答率 平成30年

	国語A	国語B	算数A	算数B
全国	70.7	54.7	63.5	51.5
静岡県	69	56	63	51
第一小	58	43	49	36
全国比	-12.7	-11.7	-14.5	-15.5

また、児童質問紙の結果によると、「算数の勉強が好き」「算数の勉強は大切だと思う」と答えた児童は県平均と同等だが、「算数の授業内容がよく分かる」「新しい問題を解いてみたいと思う」「わからないときにあきらめずにいろいろな方法を考える」と答えた児童の割合は、すべて県平均に比べて5～7ポイント低い。

本校の子供たちは、授業にまじめに取り組むようになったが、学力定着には課題がある。

これまで、本校では市の授業改善テーマ「子供たちが主体的に思考をはたらかせる授業づくり」を受け、算数科を窓口とした3年計画の研修を進めてきた。考える必要感のある魅力的な学習問題を子供たちとつくることで、主体的な学びの姿が増え、意図的な交流の場を工夫して取り入れたことで、自分の考えを説明できる子が増えたなどの成果がある。反面、知識・技能の活用や、学習の定着が課題である。

2 協力校としての取組内容


算数科を窓口とした授業改善を中心に、自尊感情を高める学級づくりなど教育活動全体で研究を推進してきた。

(1) 校内研修の充実による授業改善

① 授業公開と学年部研修を核とした授業改善

全員が、少なくとも1回以上の授業公開を行

御一小 授業10



- 1 はじめと終わり(45分間)を守る。
- 2 はじめと終わりのあいさつをしっかりする。
- 3 学習問題は赤枠で囲む。
- 4 学習のまとめは青枠で囲む。
- 5 ねらいや板書計画をもって授業に臨む。
- 6 子どもが考えをつくる時間を適切にとる。
- 7 子ども同士の「かわり」の場面を設定する。
- 8 定着につながる場を設定する。
- 9 ICT・具体物・ネームプレート・ワークシート等を活用する。
- 10

うことに加え、学年部ごとの中心授業を通して、ねらいに迫るための手立ての工夫や、説明する力の育成を研修した。具体的には、御一小授業10や、授業設計診断などを活用した。公開授業後は、KPT法で振り返りを行い、研修だよりの発行により全職員で共有するようにした。

また、市スクラムゼミナール講師による指導を受け、方向性と課題を共有した。

本校の授業づくりの課題

- コンテンツを指導する意識から抜けられない
→コンピテンシーを育成する授業へ
- 単元構想が弱い



- ◆内容ベースから資質・能力ベースへの授業転換
- ◆授業転換を支える単元デザイン力

② 質的改善のための取組

職員の中には「これまでの丁寧な指導の積み重ねにより、児童の学ぶ姿勢が向上した」という成功体験があり、このことがともすれば「学力定着にはもっとドリルなどの練習が必要」との意見になりがちであった。また、丁寧に指導するあまり、「子供主体」と言いつつ実際には教師主導の授業やコンテンツを教えることに終始してしまいがちであった。全員の足並みをそろえ、活発な発言≠よい授業≠力をつける授業という意識転換をしていくことが2年目の課題であった。授業者が、数学的な見方・考え方や資質・能力についての理解を深め、単元全体を組み立てる単元デザインを研修していくにあたり、事前研修に県サポートチーム講師を招聘し、立案段階での職員の疑問を解決することができた。


また、牧之原市立相良小学校、川崎市立川崎小学校など、本校がめざしたい先進校の研修会に複数の教員で参加し、そこで学んだものを共有する時間を設定した。取組の中で本校の研修に取り入れたいものが提案され、研修推進委員会を中心に実践した。加えて、県学力向上推進協議会長による学校訪問で、公開授業を通し、改善すべき点について助言を受けた。

研修の過程で職員からは、「内容ベースから、資質・能力ベースの授業に転換していく必要があることはよくわかったが、具体的にどんな授業をめざせばいいのか研修したい」というニーズが高まった。島根県立大学齊藤一弥教授による実演提案授業を全職員で参観し、講話を通して資質能力ベースの授業について理解が深まった。

③ 資質・能力ベース授業への転換

資質・能力ベース授業への転換のために、まずは授業のゴールの転換をはかることにした。授業研究においては、「算数の授業を通して、〇〇な力をつける。」ことが授業のゴールとなっているかに着目して話し合うようにした。

研修だよりの



視点
掲示した算数用語や問題文の挿絵、具体物、既習事項の掲示が、子どもたちが説明に有効だったか。

Keep 【成果・続けたいこと】	Problem 【課題】
<ul style="list-style-type: none"> ○りんごど箱の具体物を用意したことは、子どもたちが思考を働かせ、説明するために大変効果的だった。 ○既習事項や算数用語の掲示を意識して、説明する際に活用しようとする子どもが増えた。 ○書画カメラで自分の考えをテレビに映すことは、説明する側、聞く側の両者にとって大きな助けとなった。 ○ホップ・ステップ・ジャンプの流れは、本時だけでなく単元を通してやってきたことで、子どもたちも見通しをもって問題に取り組めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ▲教材研究の時点で、本校で扱っていないだけでなく、他の教科書会社の扱って把握し、その上で授業を組み立てる。 ▲子どもたちの考えを最終的にどの観点かについて、明確にしておく。 ▲除法の検算を検算として扱うのではなく、あるわり算の解き方の一つのこと。→わり算表現をかけ算表現に。 ▲「一つの数」「いくつかの数」なされた数を抽象化する習慣をつける。 ▲今日つきたい力に直接関係ない部分たちに考えさせずに教師が与え、授業を展開する。

Try 【今後チャレンジしたいこと】
 ・他社の教科書も参照する。→問題の扱われ方、解決へのアプローチの仕方を検討する
 元や問題の本質的な理解を深める。

例 6年生 「分数のかけ算」学習の場合

本時のねらい	【before】 分数×分数の計算のしかたがわかる。	【after】 分数×分数の計算の意味を理解する。
本時のまとめ	分数×分数の計算は、分母×分母、分子×分子で計算できる。	かける数が分数になっても整数や小数のかけ算と同じように考えられる。

また、めざす方向性について PDCA サイクルを細やかに回すため、県サポートチーム講師や、御前崎市スクラムゼミナール講師などの外部講師や地域の先輩から御指導をいただく機会を積み重ねた。まずは、教員がめざす授業について学びを深めることを強く意識し、新学習指導要領を見据えた、算数の本質に迫る御指導をいただき、新たな視点で教材や授業を捉えることができるようになった。

④ 授業転換を支える単元デザインの工夫

「単元デザイン」とは、従来の単元構想である。「単元で考えることが必要」と指摘されながらも、どうしても本時案を重視し、その1時間をどうするかが研究の中心になってしまっていた。そこで、単元全体を考えるために、思い切って単元構想の形式を変えることにした。単元が教科書の並び通りの内容や時数の集まった、教えなければならないものという捉えから脱却し、単元全体でつきたい力をつけるために、子供の実態や思考を考えながら、単元全体を組み立てていくことが必要であると考えた。



また、子供たちが生活の中で培ってきている「数学的な見方・考え方」を価値づけ、さまざまな単元で「数学的な見方・考え方」を働かせて課題を解決していけるように育成していく必要があると考えた。これまでも、教材研究は積み重ねてきたつもりであったが、何を、どんな視点で研究したらよいか、基本に立ち返り、学年で他社の教科書を見比べることから始めた。視点として

- ・単元と既習単元のつながりや、この単元がこの先どの学習と繋がっていくのか。
- ・教材の本質は何か？
- ・単元を貫く見方・考え方は？
- ・なぜその数字なのか、その教材の意味は？

などを問い返しながら学年集団で教材研究を行うようにした。そのために、校内研修では、学年研修の時間を多く設定した。

こうして作り上げた単元デザインを学年で共有にすることで、教師間の教材研究の深まりが見られた。さらに、学年ごと、互いに授業を公開し合い、試行錯誤し、よりよい授業をめざして改善を重ねることができた。

例 4年生 「四角形」の単元デザイン

当初は、「垂直」「平行」について学習した後、「垂直」「平行」に着目して「平行四辺形」「ひし形」「台形」について1つずつ性質などを学習していく計画を立てた。しかし、子どもの思考は、この順番通りではない。単元を大きくとらえ、四角形全部を扱いながら定義や性質が理解できるようにしたいと考えた。

また、生徒指導を基盤とした学びの集団づくりの側面から、学校全体で大きな渦をつくり、同じ方向で授業が行われるよう、めざす授業を「だ（だれもが活躍）い（いつでも考え）じ

(自分たちでつくる)」とし、取り組みを始めた。学年が上がった時、また1から授業を創るのではなく、6年間積み上げていけるような授業づくりをめざしてきた。

⑤ 教師の授業力を高める

教材研究を深め、単元デザインを工夫することと同時に、自分たちの授業を振り返り、改善する手段として、テープ起こしを実施した。まず、授業自己振り返りシートを使い、教師の話す量や速さ、言葉の使い方など自己分析を行った。次に、授業の様子を書き起こしたシートをもとに、学年部で話し合いをした。その結果、思った以上に教師が多くを話してしまっていること、「いい？わかった？」など無意識に発している言葉が多くあることに多くの教員が気付くことができた。

さらに、「学習問題が提示されるまでに、必要のない話題に多くの時間を費やしてしまっていた。」や「子供の大事なつぶやきや発言を聞き逃していた。」「発問が子供に伝わる言葉になっていない。」など授業改善への課題を見つけることができた。

テープ起こしを通して、子供たちは教師の言葉に忠実に反応していることを知り、改めて教師の発する言葉を吟味する必要性や、教師のゴールに向かって子供を誘導していくのではなく、教師が子供の言葉に耳を傾けていく大切さを学ぶことができた。

授業記録を分析して気づいたことメモ

～気づいたことメモから～

私 大きい声で反応している子の声を拾ってしまう。担任が子どもの言葉を聞けなければ、子どもは聞き上手にならない。
算数用語を正しく使えること→訓練！訓練

(2) 学びの土台づくり

子供が主体的に学び、思考する授業の土台づくりを全校で足並みをそろえて取り組んだ。家庭的なハンデを抱える児童が多いからこそ、筆入れの中味をそろえる、もちものをそろえる、など環境を整える取組は必要不可欠なものである。授業を担当するすべての教員が同一歩調で指導できるよう、学びの構えや自分からノートについて、詳細なマニュアルを作成した。



また、これらを児童向け、保護者向けにも作成し、共通理解を図った。「えんぴつピン」や「自分からノート」「ほメッセージ」の取組が児童、保護者に定着しつつある。年2回の全校ノート展を開催し、児童や保護者の意欲が持続できるようにした。

九九や計算カードなど、ある程度の反復練習が必要なものがあることは事実であり、そこにハンデを抱える児童も多く在籍している。毎週水曜日に地域ボランティアに来校してもらい、反復が必要な児童への対応をお願いしている。

(右の写真)



1) 5つの構え
文責 田宮

落ち着いた空気の中で、集中して授業に取り組めるようにする。

1	1の付く日は、えんぴつピン(1・11・21日)
2	背すじピン
3	チャイム着席
4	始めと終わりのあいさつ
5	授業の準備は休み時間

★学習カレンダーを教室に掲示
★えんぴつピンの日は、カードに担任がチェックし、学習委員会が集める

○学習用具について○
①共通理解事項
【筆箱の中身】
○鉛筆 Bか2B以上の鉛筆 5本(無地)
○赤青鉛筆
○線引き(13~15cm・イラスト無し)
○よく消える消しゴム(基本的には白の無地)
○マイネームペン(油性)
【算数セット】
3年生以上
○三角定規 ○コンパス ○分度器

【学習用具の約束】
○すべての持ち物に、名前を書く。
○筆箱は、6年間同じものを大切に使う。(破損した場合は同じ形の物を個人購入する。)
○全学年、シャープペンは使用しない。
○鉛筆は毎日「鉛筆ピン!」。削り忘れたら、朝8時までに削る。

その他
・書写で使った筆は、学校では洗わず持ち帰る。
・書写の練習用紙や新聞紙は、持ち帰る。ゴミは最小限にする。
・忘れた時のノートやドリル類の事務室でのコピーは控える。
・長期休業の生活表に持ち物チェックリストをつける。

(3) 児童の現状と課題把握

総合質問紙調査 i-check を全校で2回行い、全職員で結果分析を行った。検査結果を元に、学級の特長や配慮すべき児童を客観的な視点で把握し、学級経営に活かした。2回目の調査では、変容や配慮児童についての情報を共有し学級編制に活かした。さらに、本調査で得られた個人向けメッセージを配付し、一人一人の意欲向上も図った。算数の標準学力調査を5年生対象に実施し、教員が單元ごとの理解度を把握し、授業に活かした。

3 取組の成果の把握・検証

(1) 児童の学力について

全国学力学習状況調査結果（平成31年度）から国語、算数ともに、本校の正答率が全国、県の平均値を上回ったのは、現在の全国学力・学習状況調査が開始されて以来初めてのことである。また数学的な考え方の観点で平均正答率を上回ったものが多く、新学習指導要領で求められる学力がついてきているといえる。

質問紙調査においても、算数への意識が高まっていることがわかる。

	国語	算数	算数の授業は好きか	算数の勉強は大切だと思うか	算数の授業内容はよくわかるか
全国	63.8	66.6	68.6	93.7	83.5
静岡県	65	66	70.4	94	83.5
第一小	66	68	75.2	96	86.2
全国比	+2.2	+1.4	+6.6	+2.3	+2.7

(2) 学校評価における児童の自己評価から

「めざす授業像に向けて精一杯取り組んでいる」と回答した児童は88%、「授業がわかる」と回答した児童は、90%と、いずれも平成30年度に比べ増えている。また、授業の中で判断の根拠をもって説明したり、これまで身に付けてきた見方・考え方を働かせて考えたりする姿が多くみられるようになった。学びの土台づくりや授業改善が児童の姿として表れてきた。

(3) 教職員の意識や姿から

学年研修が充実し、教科の本質に迫る教材研究を通し、教員自身が各單元でつけたい資質・能力（子供に付けたい力）や数学的な見方・考え方を明確にして授業を行うことができた。

単元でどんな数学的な見方・考え方を働かせたいかを押さえることで、授業の中で、子供の思考に沿った数学的活動が設定できるようになった。

授業者は、単元デザインを考えることを通して、単元の縦と横の系統性を理解する重要性を実感でき、つながりの中で子供たちに今何を身に付けさせなければならぬかが明確になった。また、今の学習で習得した資質・能力が次の学習の基盤になることも実感できた。

自身の授業のテープ起こしにより、自己の授業づくりの課題が明確になり授業参観を自分の授業力向上につなげることができたと感じている職員が多い。

(4) 外部評価

① 学校訪問を通して

- ・授業に様々なものが用意され、興味をもたせ、のめり込ませている。（具体物・ICT機器の活用等）
- ・子供の活気や温かさを感じる。先生達の子供と一緒に授業を創ろうという意識や子供の目線まで下げる姿勢が信頼感を得ている。

② 研究発表会参加者アンケート・分科会協議内容から

- ・落ち着いて授業に集中していた。子供どうしが学び合う温かな雰囲気があった。
- ・正解ではなく、納得解を見つける設定の中で、子供たちの数学的な見方、考え方が働いていると感じた。教員の手立てで子供の学びは大きく変わることを実感した。
- ・子供たちが「数学の言葉」を使って説明していた。子供の声が多く、単元を貫く学びが感じられた。
- ・単元を通して付けたい力が明確で、わかりやすい授業だった。教師が単元で付けたい力を意識することが大切だと分かった。
- ・内容ベースから資質・能力ベースへの転換の具体を授業の中での子供の姿で見ることができた。単元デザインと本時のリンク、資質・能力や見方・考え方が明確に示された授業案がとても参考になった。
- ・特別支援学級6学級を参観したが、どの学級も大変落ち着いて子供たちが集中して学んでいた。学習環境が整っていること、教員の表情やトーン、やさしさが伝わってきた。



4 今後の課題

(1) 児童の学力について

全国学力・学習状況調査結果（平成31年度）から児童質問紙調査で明らかになった課題は右表Aのとおりである。

また、下のB表はこれまでの分析同様、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」児童を合わせたものですが、一見すると良い表れのように見える。

しかし、右下C表は同じ質問について「当てはまる」と回答した児童のみの値であ

A	算数の学習を生活に活用できないか考えるか	時間は十分だったか
全国	76.5	84
静岡県	76.1	82
第一小	72.3	81.2
全国比	-4.2	-2.8

B	諦めずにいろいろな方法を考えるか	わけを理解するようにしているか
全国	82	84
静岡県	82	84.1
第一小	87.2	84.1
全国比	+5.2	+0.1

C	諦めずにいろいろな方法を考えるか	わけを理解するようにしているか
全国	46.3	48.4
静岡県	44.6	46.4
第一小	42.6	38.6
全国比	-3.7	-9.8

り、全国平均を大きく下回っていることがわかる。この傾向は他のいくつかの質問においても見られた。このことから、自信をもって「当てはまる」と答える児童を増やしていくことが課題である。そのためには、資質能力ベースの授業を通し、子供たち自らが「今、なぜこのことを学んでいるのか」「この学習にはどんな意味があるのか」を自覚化できるような授業づくりがさらに求められる。

(2) 教職員の意識や姿から

教員の授業づくりへの意識や技能の高まりは成果としてある。しかし、授業づくりと学びの集団づくりを両輪ととらえ、子供たちが自分ごととして思考を働かせることができる学びの集団づくりに継続して力を入れていく必要がある。

また、職員の中には日々表面的に表れる姿（問題が理解できていないのではないか、単元テ

ストで点数が取れていないのではないか) などへの不安が残っている。このことを解決するためには、教員が現在の取組を信じ、資質・能力ベース授業への意識転換を確実なものとしていくことである。

また、今後もさらに授業改善を積み重ね、第一小の授業スタイルを児童と教員とで確立したい。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	静岡県	番号	22
-------	-----	----	----

協力校名	熱海市立第一小学校
------	-----------

1. 当初の課題と全国学力・学習状況調査の結果

昨年度の全国学力・学習状況調査結果の分析を受け、国語では「決められた時間の中で文章を読みとること」等に、算数では「数学的な考えを要する問題」等に課題があった。特に「主体的に学ぶ」事から、思考力・判断力を育てる、継続的な授業改善を図る必要があった。

しかし、子供が主体的に学ぶことができるよう、教師主導での授業形態の改善を図ったとしても、一部の子供たちにより授業が進行しては、一人一人の子供たちの学力向上につながらない。そこで、今年度は「すべての子供たちが学習に参加しているか」と「子供が夢中になる授業とは」を授業改善の視点として焦点化し、中心課題とした。

一方で数年前から、戦略的に学力を向上させる取組として、1年生から6年生までの静岡県の定着度調査を継続的に検証し、定着が不十分な学年の学習内容を全体で取り上げて、日頃のスキルアップタイム（補充学習）や家庭学習の充実で対策してきた。決して単年度の学力向上への取組ではないため、その成果がどのように出るかが楽しみでもあった。まずは、その結果を見てもらいたい。

【全国の平均正答率と本校の平均正答率を比較】

◎高い：+3ポイントを上回る ○やや高い：+1から+3ポイント 同じ程度：±1ポイント以内 △やや低い：-1から-3ポイント ▲低い：-3ポイントを下回る

実施年度	国語A	国語B	算数A	算数B
平成27年	◎	同じ程度	○	○
平成28年	○	△	▲	同じ程度
平成29年	▲	△	▲	△
平成30年	▲	▲	○	△
平成31年	○		◎	

このように全国学力・学習状況調査をみると、今年度、飛躍的に向上したと言える。しかし、これを今年度だけの偶発的な結果としない取組が重要である。毎年調査を受ける子供は変わってい

くため、「今年の子供はできる」とか「隔年で学年差がある」などと言われがちである。そのため恒常的に学力を安定させる取組が必要であった。本校の場合は、それが小学校2年生からの国語の読む力の定着と小学校3年生から4年生の算数の小数・分数の学習の中で「数学的な考え方をいかに子供たちに身に付けさせるか」ということであった。

また、新しい学習指導要領への移行とともに、これまでの「学力」を、未来を拓く「資質・能力」へと考え、その資質・能力を日頃の授業でこそ身に付けねばならない。以上のことから本校では、「主体的・対話的で深い学び」の実践を日頃の授業で培うことを今年度の課題とし、併せて授業実践を校内研修として積極的に参観し合うことによって、教員間の授業改善の視点の共有と研修体制の充実も今年度の課題とした。

2. 協力校としての取組状況

(1) 授業改善 I 「すべての子供にこだわる授業」

① 一人一人の学習参加を意識する

私たち教師は、授業中に子供たちの「ああそうか」「わかった」とつぶやく声を毎時間聴きたいはずである。しかし、教師が説明しすぎたり、いつもまとめてしまう授業は、いつしか子供たちの考える作業を停止させ、自分で考える力を育たなくしてしまっている。

年度当初、授業中の教師の共通の言葉かけを「根拠は何?」「説明してみて」「本当なの?」として、最初から教師が説明しない授業を意識した。子供たちの「なぜ」「どうして」を大切にし、子供が子供に説明する授業に転換したかったからである。そのために、まずは一人の子供の疑問を大事にした。これは新学習指導要領にある思考力・判断力・表現力を育む授業を意識したことにも繋がった。一人一人の思考を大切にする授業への転換こそ、授業改善の核であることを確認できた。



それと同時に、子供たち同士が学び合える関係づくりを意識した。席の隣同士はいつでも聴き合える仲間であることを確認し、みんなで課題を解決する喜びを目的化した。学級集団を一年間で深い学びの集団に成長させることが、各担任の目標になっていると改めて確認できた。

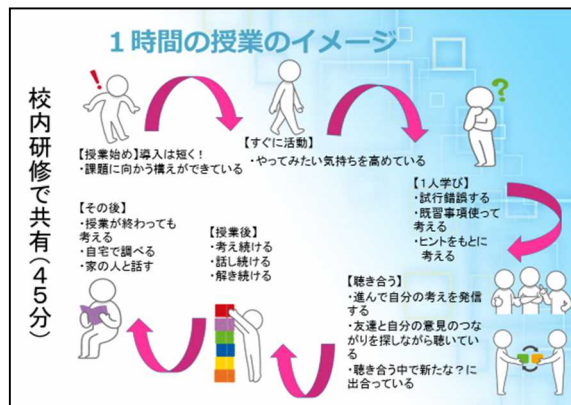
② タイムマネジメントの中で、ふり返りを意識する

子供たちの個々の疑問ややり取りを授業で取り上げれば取り上げるほど、時間が超過する傾向が見られた。すべての子供たちにつけたい力をつけるために、平成29年度の課題にあったタイムマネジメントをすることが必要であると確認できた。その授業を構成していく役目こそ教師の出番となった。

45分の授業の構成の中で、「導入部分をシンプルにする」「必ず自分で考える時間の確保をする」「みんなで考える課題を明確にする」「振り返りを重視する(特に算数は適用問題を必ず入れる)」が基本となった。

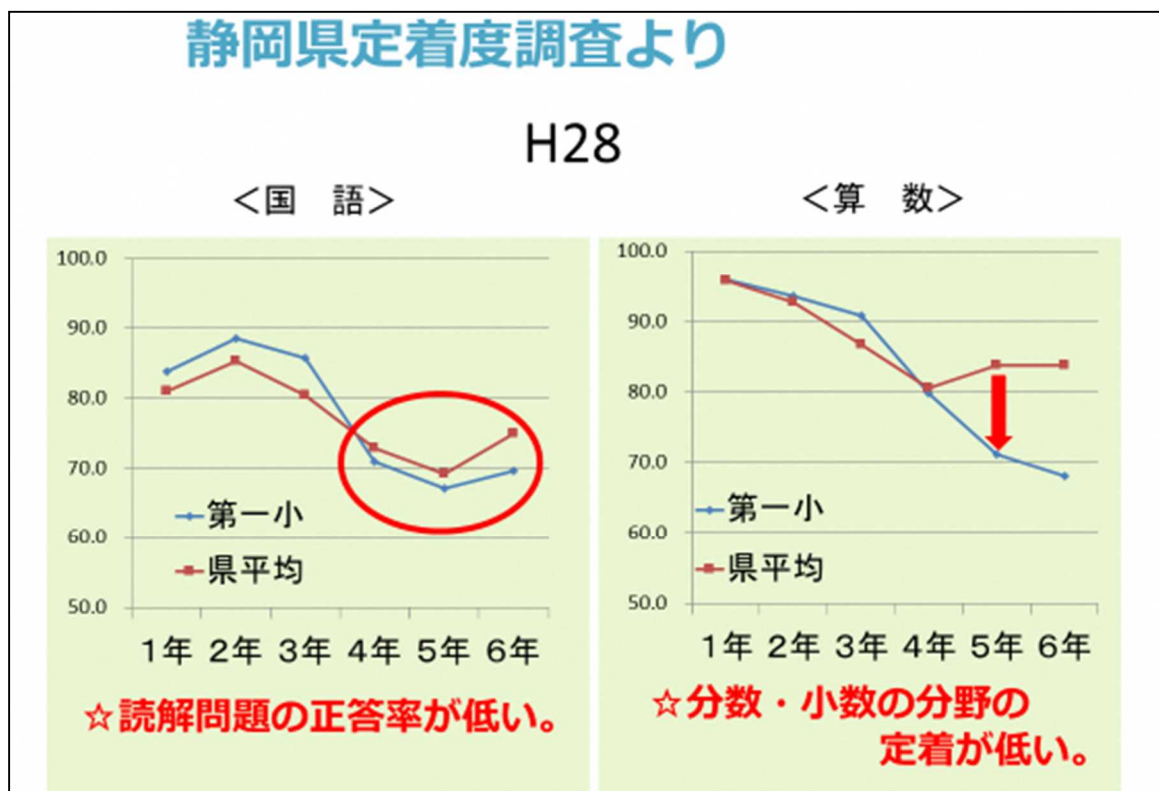
特に算数では、終わりに必ず適用問題を入れることを意識した。本時の学習をふり返る意味でも似たような問題を自分でもう一度やることを大切にしたい。

子供たちの主体性を大事にすることにより、目的が多面に拡散すると授業として深まりが保障できない。まずは明確な学習課題の提示とみんなで学び深めることの焦点化を子供たちの思考の流れを読み、タイムマネジメントすることが教師の専門性となることを確認できた。



③ 1年生から6年生までの学力を分析する

全国学力・学習調査の検証をすることはとても大切なことである。ただ、6年生の4月に行われる調査の結果だけの分析で、学校全体の検証をすることは危険であると考えている。よって本校では数年前より、静岡県で毎年1月にすべての学年を対象に行われる定着度調査を県の平均と比べて、本校の実態を探るための資料とした。



これは平成28年度の本校の各学年の結果と県平均との比較である。特徴的なことは、国語は4年生から、算数は5年生からの落ち込みが顕著であることがわかる。

この年の検証では、低学年から中学年に向けての読解力に課題があることがわかった。特に、教科書中の本文も2・3年生から急激に量が増え、本文全体として読み取る力が備わっていないことが確認された。そこで、速読即答の必要性を認識し、朝学習の時間をスキルアップタイムとして設定した。時間内に速く読んで理解し、まとめるスキルを取り入れたのである。

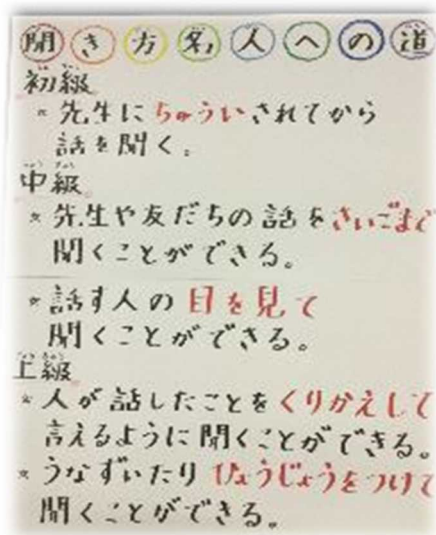
算数も小数や分数の定着が低いことがわかり、平成 29 年度と平成 30 年度は、小数・分数分野に限定した授業研修を全体で行った。それにより、新規採用教員などの若手が多くなる 3、4 年生の授業を学校全体で子供たちを育てる視点が生まれた。小学校の中学年において、学習内容がわからない子供が増える現状をなるべく減らし、すべての子供たちが力をつけていく研修を重ねることができた。

(2) 授業改善Ⅱ「学びを深める夢中にこだわる授業」

① 夢中の学びの構えとなる聴き合う関係作り

4 月当初、横浜国立大学高木展郎名誉教授を招き、新学習指導要領が求めるこれからの授業改善の方向性について教わった。特に、向かうべき方向性となる実際の授業の映像を見ながら、具体的な手立てについて説明を受け、全体として議論した。子供たちが、主体的に学習を進めていくためには、まずは子供たち同士が聴き合う関係を育てることの重要性を確認した。

研修部からは、段階的な「話す・聴く表」の提示がされ、それを各学年に応じて、アレンジしたものが各教室に提示された。確かに、1 年生と 6 年生では子供たちの成長と学習の内容によって、具体的な姿が異なるために、統一した表を作ることは難しかった。それが、少しずつ改良され今に至っている。「話す・聴く表」は学習課題を深めるための手段としての役割を担っている。それが目的化されるわけではないが、子供たち同士の話し合う・聴き合う力が高まってこない、学習に深まりが見られないことも確認された。また、お互いに話し合う中で、尊重し合ったり認め合ったりする事の重要性が確認された。ここでも、学級づくりをしながら、子供たちの成長を目指す事が確認されたのである。



② 夢中になる授業の姿から

以前より静東教育事務所の指導訪問では、子供たちの思考に沿った学習の計画を指導されていた。また、今年度には県教委より「自分ごと」として主体的な授業への転換が促されていた。そのような中、本校では子供たちの「夢中」を意識した授業改善を模索した。特に、子供たちが夢中になって学習を深めている時を出し合い、その要因となる「魅力ある教材・教具の選定」「学習内容を深める課題設定」「学びたくなる環境設定」の工夫をする重要性が確認された。



1 時間の学習指導案の中でも、「夢中ポイント」を示すことで、授業者としてこだわった視点を提示するようにした。

③ 単元計画中心のつきたい力を意識した授業づくり

これまでの指導案は、授業公開する1時間にこだわりを見せた授業案であった。しかし、単元を通してどのような力をつきたいのかを明確に授業者がもつ必要がある。その必要性から、1時間で示す指導案から単元全体で子供たちを育てる指導案への変更を行った。単元計画中心の指導案づくりに変化することで、日頃から学年間での担任同士の話し合いが多くなったように感じる。つまり、日頃の子供たちの様子から自然とつきたい力や課題、各学級の事柄や授業での学びについて語り合うようになったのである。今後は、授業に入っているもの同士が、子供たちの姿をもとに話し合いながら、中期的なスパンで修正しながら授業の再構成を考える「カリキュラム・マネジメント」の視点が図られると良いと考えている。

(3) 授業から子供たちを育てる研修体制

① 向かうべき授業の共有化

年度当初の校内研修の中で、これからの授業の形と言っても、具体的な子供たちの姿として授業がどうなっていくのかを共有する必要性が、課題としてあげられた。前述した、高木名誉教授を招き、まずはモデルとなる授業の様子を映像として紹介（他校の算数の授業）し



てもらった。もちろん自校の子供たちでないため、単純には向かうべき姿としては語れないのも承知の上で、「集団としての子供たちの成長」と「教師の導く役割」についてそれぞれが議論するようになった。

特に良かったことは、新規採用の教師とベテランの教師が同じ授業を見てそれぞれの立場で考えたことを語るようになり、お互いに刺激となったことである。例えば、同じ授業場面を見てもベテラン教師にとっては、当たり前であっても、新規採用教師にとっては、基本技術として確認された。それを方略として伝授する場面になった。また、ベテラン教師から見ると、その一場面だけではないそれまでの文脈を考えるために、学級づくりや人間関係づくりの手順を考えると、若い教師は、子供たちの近い距離間ですぐにでも試すことができた。実践を通して、子供たちの成長を語りながら教師の役割や立ち位置などを確認できる機会ともなった。

② 研修体制の樹立

「すべては授業から」を全員の共通認識にし、高学年部低学年部に分かれ、グループ研修を行った。教科を固定せず、全員が一度は授業を公開する形を取った。昨年度までは、なるべく少ない授業研で事前研を充実し、全員で教材研究、授業案の遂行までを行い共通理解を図った。しかし、今年度は11月の全クラス公開授業発表会に向け、授業スタイルの確認、子供を育てるための授業への変換を主眼に置いたため、全員が授業公開をするスタイルを取った。

授業改善と言っても、まずはこれまで培ってきた技術を捨て去ることではなく、子供たちを育てる方向性を明確にし、子供一人一人を育てる視点で、授業を見直す必要がある。だからといって、毎時間話し合いや探究的な学習をし続けるわけでもない。まとめる時間もスキルアップの時間も単元計画の中にきちんと位置づけ、単元を通して身に付ける力を明確にするようになった。



また、4月当初に確認した授業改善の視点が2学期になってどのように変化したのかを確認するために、県内外の学校に積極的に研修に参加した。特に、同じ学年の子供たちが、同じ時期にどのように成長しているのかを確認することで、自分の授業の修正や新しい方法を取り入れて試してみることなどができた。発表会などの完成された授業ではなく、その過程の段階の授業を見ることで、授業者がどのような視点で子供たちを導いているのか、学級づくりをしているのかを学ぶことができとても有効であった。

校内研修も授業研究と同じく、年間計画が重要となる。単に順番に授業公開をするのではなく、研修主任を中心とした研修部の、その時期ごとのねらいと成長のふり返りがPDCAサイクルとして適切に運用された時に、学校全体のチームの力として向上がのぞめることを感じることができた。

③ 多面的・多角的に授業を見直すためのサポート体制

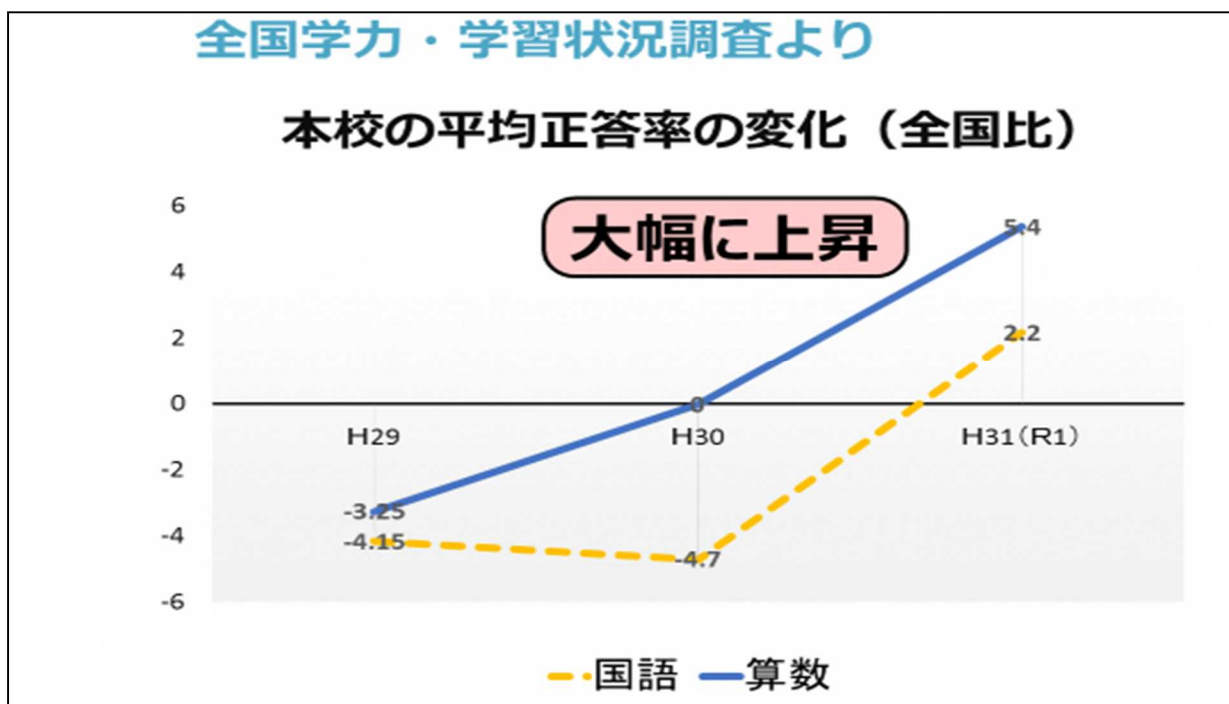
主体的・対話的で深い学びができる授業を目指し、校内研修を通して考えることの楽しさを味わう授業づくりをしてきた。しかし、自分たちの考えが閉塞的にならないように、多方面の方々から助言をいただくよう心がけてきた。

静岡大学大学院の村山功教授からは、学力を向上させるために学校がすべきことや個々の子供の変化に向けた授業改善の方向性を、静東教育事務所地域支援課の中山靖子教育主査からは、校内研修を効果的に行う方法等を教えていただいた。また、熱海市教育委員会の元矢裕己指導主事には、授業研究だけではなく、普段から数多く来校していただき、授業づくりについて指導をいただいた。

何よりも今年度は、高木名誉教授を中心に一年を通してどのように子供たち、授業が変化してきたのかを捉えてもらった。変化を客観的に捉えてもらうことで、今後の修正点、来年度の方向性を確認できたことはとても重要であった。

3. 取組の成果の把握

【全国学力・学習状況調査における全国平均点と本校との比較】



4月に実施された全国学力・学習状況調査においては、上記のとおり、国語・算数ともに、例年から比較すると大幅に上昇し、全国平均を上回ることができた。

【R1年度県定着度調査における県平均点と本校との比較】

[定着度調査の県平均点と学校平均点]

科目種別	国語					
学年	1	2	3	4	5	6
県平均点	87.3	85.8	78.0	75.7	70.8	72.0
学校平均点	87.5	88.5	75.05	77.8	80.75	73.55

科目種別	算数					
学年	1	2	3	4	5	6
県平均点	95.3	89.0	82.5	83.3	76.4	84.6
学校平均点	96.4	91.7	88.45	83.05	84.05	90.05

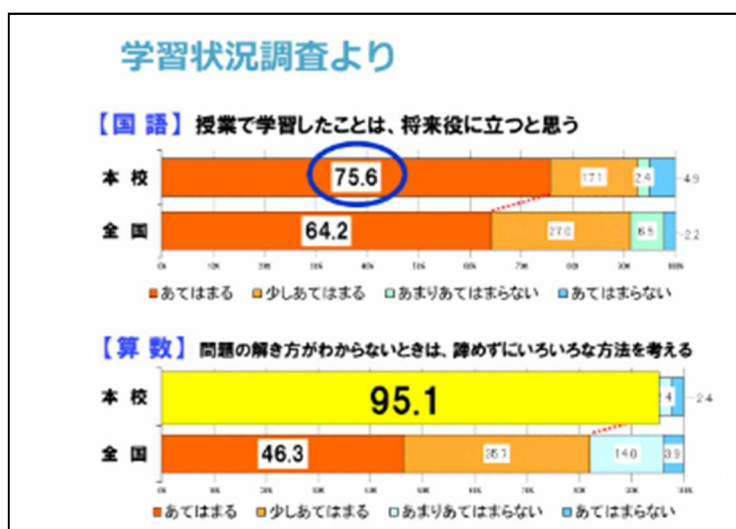
1月に実施された県の定着度調査では、国語はほとんどの学年が県平均を上回った。また、算数では、どの学年においても正答率が高く、ほとんどで県平均も上回った。例年と比較しても、学習した内容が概ね定着していると考えられる。

【学習状況調査から】

児童質問紙での「国語・算数の学習が好きか」という問いに対し、国語は73.1%算数は87.8%の子供が好きと答えている。また、「国語・算数の勉強は大切だと思うか」という問いに対しても、国語92.7%、算数92.7%とどちらも高い割合を答えている。どちらの教科も好きと答える児童が多いばかりでなく、大切な学習であると答え、学ぶ意欲の高さだけでなく、その意義についても考えていることから主体的な学習が進んでいることがうかがえる。さらに「国語の授業で学習したことは、将来役に立つと思うか」「算数の問題の解き方がわからないときは、諦めずにいろいろな方法を考えるか」という問いに対して、「役に立つ」「考える」という答えが、全国平均と比べても大幅に高い割合を示している。自分たちが主体的に学習することが、将来の生きる力に繋がっている実感をもっていること、また課題となっていた粘り強く学習する姿勢も授業を改善してきた結果が出ていると強く感じる事ができた。

また、「友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができますか」という問いに対して、「当てはまる」と答えた子供が多いことから、友達との対話を通して、深い学びにつなげ、それが学びの実感にもつながる可能性を確認できた。

これらの結果から、将来を切り拓く生きる力・確かな学力を育むためにすすめてきた「すべての子供たちが、夢中になる授業」への取組は、一定の成果を見る事ができた。



4. 今後の課題

調査やアンケート結果から、ある程度の学力は付いてきたと考えられる。授業改善の方向性として間違っていないといえる。しかし、更に子供たちの成長を見据えて、具体的な改善に取り組まねばならない。特に、学校だけではなく、家庭地域との連携として、読書活動の充実、相手を尊重し合う道徳心を育てる地域作りをすすめていきたい。また、学校の研修として具体的な今後の課題を以下のようにまとめた。

【子供が夢中で取り組む授業実践のために】

- ① 子供が、自ら考えたくなる、解決したくなる、確かめたくなるような単元設定・課題設定をする。そのために、子供の実態を把握し、今まで学習したことを活用・発展させて、じっくり考えると何とか解決できるような課題を提示する。
- ② 国語科では「叙述を根拠にして考えを説明する」、算数科では「絵・図・表・言語・立式等を用いて考えを説明する」ことを重視し、楽しさを味わえる課題や学習展開となるよう工夫した授業実践をする。
- ③ 全学年で「聴く力」を徹底的に磨く。その上で、学年に応じた効果的なペアやグループ編成を模索する。

- ④ 授業研究を通して「付けたい力が付いたか」「子供一人一人の前の姿と比較してどうか」等、多面的な情報を得て子供の姿を捉え、確かな学力が付いたか考えていく。
- ⑤ 速く読む・速く解く・集中して解くことを目的にした、朝の「スキルアップタイム」等、確かな学力を育むための授業を支える取組を継続する。